

米草遺跡

—山宮町土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書—

2001

甲府市山宮町土地区画整理組合
甲府市教育委員会

序

土地区画整理事業に伴い、このたび、埋蔵文化財の発掘調査が実施された山宮町は、甲府盆地の西北端に位置し、近年、急速に宅地化が進行している地域でございます。また、甲府市教育委員会で設定した史跡散策路「北山野道」の西の出発点に位置づけられるほどに、文化財や自然が多く残された地域でもあり、古くは志麻莊と呼ばれていました。

一帯には古墳や古代の遺跡も多く知られ、弘法大師伝説が伝承されており、厄除地蔵尊で有名な塩沢寺や湯村温泉もこの地域にあります。そして今回の発掘調査により、新たに縄文時代前期から人々が生活を営んでいた状況が明らかになりました。。

近年、全国各地の自治体で地域の資源を積極的に活用したまちづくりが推進されておりますが、本市でも「甲府市新総合計画」に、歴史・伝統文化・自然・伝統産業などを保護しつつ、地域の活性化に活かしていくことが基本方針の一つとして位置づけられております。そのためには、地域の歴史を正しく掘り起こしていくことが不可欠ではないでしょうか。

米草遺跡の場合、約五千年も前の集落跡であるため、直ちにまちづくりに活用していくことはできませんが、山宮地域における人々の生活の始まりを語る上で極めて貴重な発見となっておりますので、本書が縄文時代研究の一助として、また郷土の歴史・文化への理解を深めるために、多くの方々に活用されますことを願ってやみません。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、試掘調査から本調査に至るまで、甲府市山宮町土地区画整理組合には多大なる御協力をいただき、厚く感謝申し上げる次第でございます。また、発掘調査に従事されました方々に、衷心より御礼申し上げますとともに、今後とも引き続き御指導・御鞭撻をよろしくお願ひいたします。

平成13年3月

甲府市教育委員会

教育長 金丸 晃

例　　言

- 1 本書は、山梨県甲府市山宮町252番地ほかに所在する米草遺跡の調査報告書である。
- 2 発掘調査は組合施工の区画整理事業に先立ち、甲府市教育委員会が実施した。
- 3 調査は試掘調査と本調査に分けて実施した。各調査期間は次のとおりである。
　　試掘調査 平成7年11月21日～12月4日
　　平成12年5月2日～6月9日
　　本調査 平成12年7月11日～8月29日
- 4 報告書の執筆は、市瀬文彬（文化芸術課長）を編集責任者とし、伊藤正幸が行った。
- 5 挿図の作成は、内藤真千子が行った。
- 6 遺物及び本書の作成に係る記録図面、記録写真などは、甲府市教育委員会が保管している。
- 7 発掘調査から報告書作成までの間、甲府市山宮町土地区画整理組合からご指導、ご助言を賜った。記して感謝申し上げる。

凡　　例

- 1 遺構・遺物番号は、各調査地区単位で通し番号とした。
- 2 遺構名は、各遺構の性格や形状に応じて付した。
- 3 全体図及び遺構・遺物の実測図の縮尺は、図に示したとおりである。
- 4 遺構図面における数値は海拔高度を表示し、単位はmである。
- 5 遺跡全体図における国土座標の数値は、平面直角座標第VIII系（原点：北緯36度00分00秒東経138度30分00秒）に基づく座標数値である。
- 6 各遺構中に表示した北を示す方位は磁北を表す。西偏約6度20分である。
- 7 本書で用いた地図は国土交通省国土地理院発行の地形図(1:25,000)及び甲府市発行の都市計画図(1:2,500)である。

目 次

序
例 言
凡 例
目 次

第1章 概 要

第1節	遺跡の位置と立地	1
第2節	調査にいたる経緯	1
第3節	調査方法	5
第4節	調査組織	5

第2章 調査成果

第1節	概 要	7
第2節	遺構と遺物	7
1	1区の遺構と遺物	7
	(1)遺 構	7
	(2)遺 物	9
2	2区の遺構と遺物	11
3	3区の遺構と遺物	11
	(1)遺 構	11
	(2)遺 物	15
4	4区の遺構と遺物	16

第3章 ま と め

第1節	米草遺跡の展開	23
第2節	米草遺跡の出土の諸磯式土器について	23

第1章 概 要

第1節 遺跡の位置と立地

金峰山麓に端を発した荒川は、上流部に板敷渓谷、御岳昇仙峡などの景勝地を形成しながら甲府盆地へと流れ込む。

急峻な流路は甲府盆地に入ると緩やかになり、随所に自然堤防を残しながら規模の小さな扇状地を形成する（以下「荒川扇状地」と呼ぶ）。荒川扇状地の扇央部は、敷島町との境、金石橋の標高340m付近に認められ、扇端部は、湯村山から音羽橋付近をとおり赤坂台地（北巨摩郡双葉町）へと続く290mの等高線のあたりになる。さらに南の中央本線付近にも扇端部を窺わせる標高280mの等高線が認められるが、敷島町に入ると釜無川氾濫原に吸収されていることがわかる。

荒川扇状地上にはこれまでにも、縄文時代から中世にいたる多くの遺跡が確認されてきた（第1図）。河川と山地・丘陵地を背景として、人々の生活が連綿と営まれてきたことをうかがわせる。この扇状地上に位置する遺跡のうちこれまでに発掘調査された遺跡は、榎田遺跡、音羽遺跡（以上甲府市）、金の尾遺跡、御岳田遺跡（以上敷島町）等をあげることができ、いずれも弥生時代から古墳時代を中心とする良好な資料を検出している。また加牟那塚古墳、穴塚古墳（以上甲府市）、大塚古墳、大庭古墳（以上敷島町）等、後期古墳も多く確認されている。また古くから荒川は「荒ぶれる川」であり、音羽橋付近には中世以降の治水の痕跡（いわゆる「信玄堤」「かすみ堤」）が認められる。

米草遺跡は荒川扇状地の扇央部から700mほど南東に下った場所に位置する。遺跡の東側には比高差130m余を測る山地（片山）があり、西は荒川に接する。地形を細かく観察すると、米草遺跡は自然堤防上に位置することがわかるが、同時に集落としては極めて狭隘な範囲に存在している（第2図）。

第2節 調査にいたる経緯

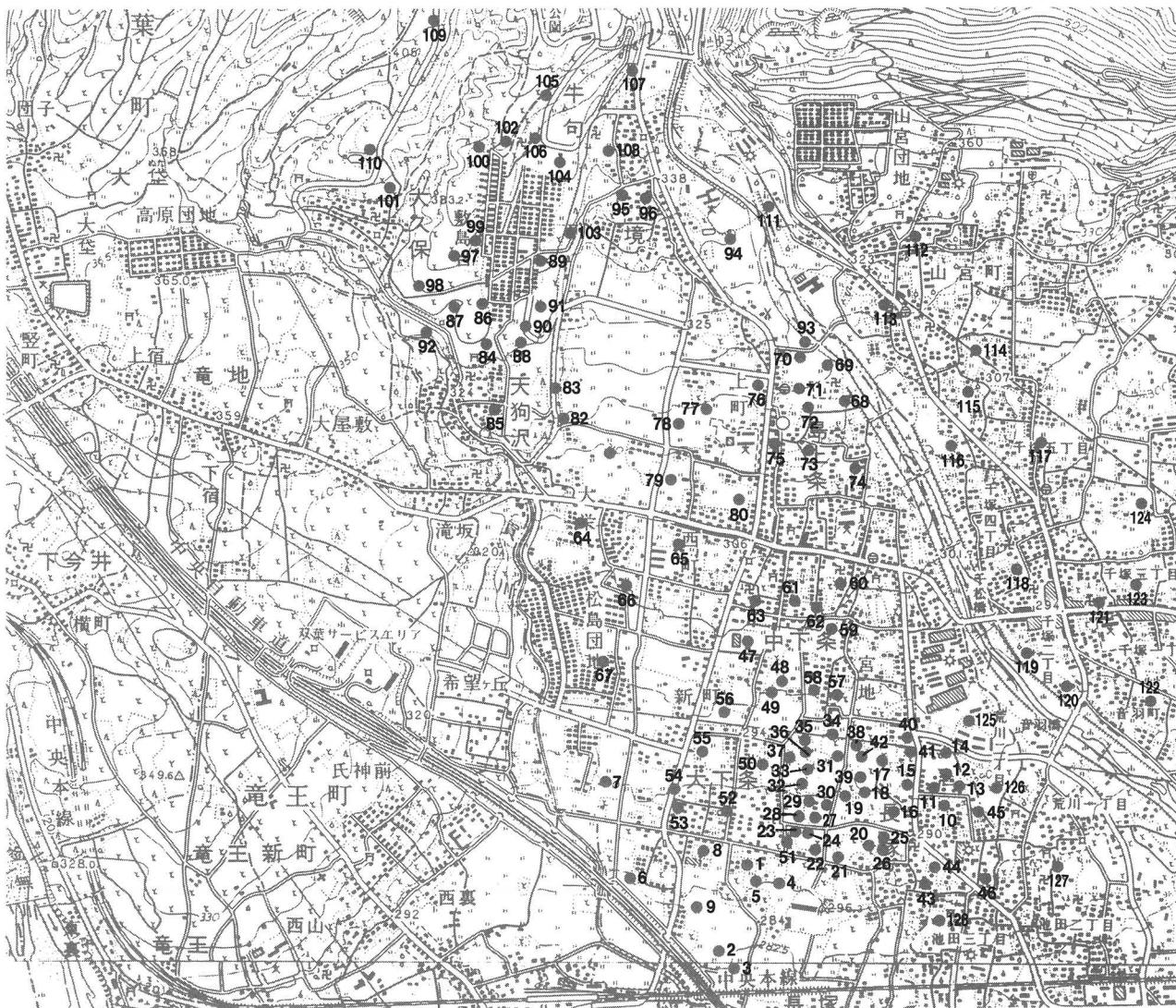
平成7年、米草古墳の周辺7haおよび土地区画整理事業が計画された。当初は事業地内で確認されていた埋蔵文化財包蔵地は米草古墳のみであったが、地形及び周辺部、特に敷島町の状況などから、甲府市教育委員会では詳細な試掘調査を実施した。

試掘調査は平成7年11月21日から同年12月4日まで実施した。当初からその存在が予想されていた米草古墳を中心として、開発地域全域に1.5~2.0m四方のグリッド40ヶ所と、地籍図等により古墳と推定される3箇所にトレーナー6本を設定し（第3図）、重機と人力により砂礫層まで掘り下げを行った。

その結果、別表のとおり11か所のグリッドから、遺構は検出されなかったものの縄文土器片、古墳時代の土師器、須恵器、近世陶磁器が少量ではあるが確認できた。特に27号グリッドは、位置的に南側の土地より2mほど高く、土器の出土量等から判断し、この付近に縄文時代の集落等が存在した可能性を想定した。

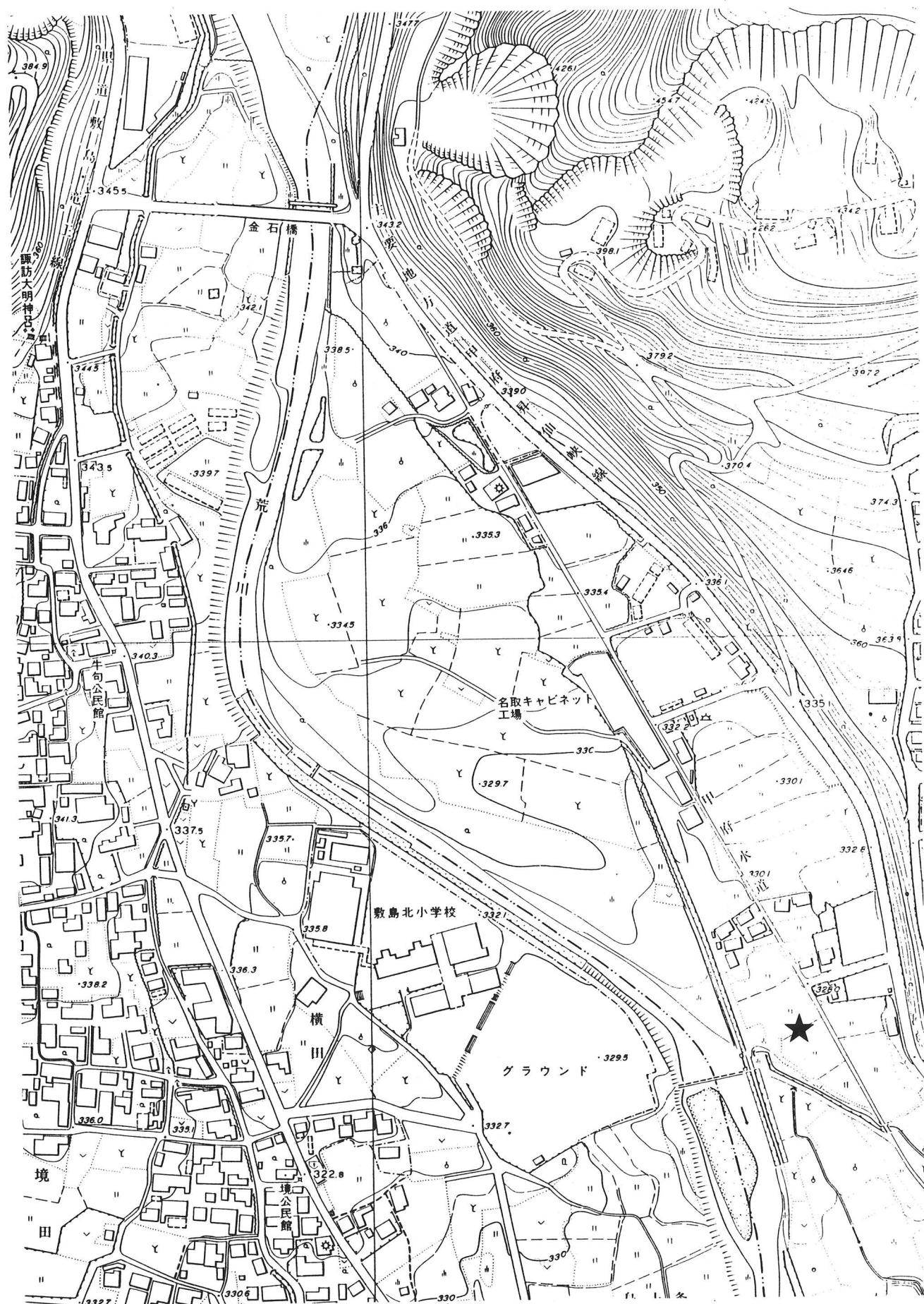
一方、6か所設定したトレーナーからは遺構は検出されなかった。遺跡地図に記載されている米草古墳からも近世の遺物が数点検出されたのみで、墳丘と考えられた石積みも近世から近代にかけて積まれたものと判断された。

この試掘調査結果を踏まえ、発掘調査を必要とする区域を確定し、発掘調査費用の積算をするため、さらなる詳細な試掘確認調査を平成12年5月2日から6月9日まで実施した。

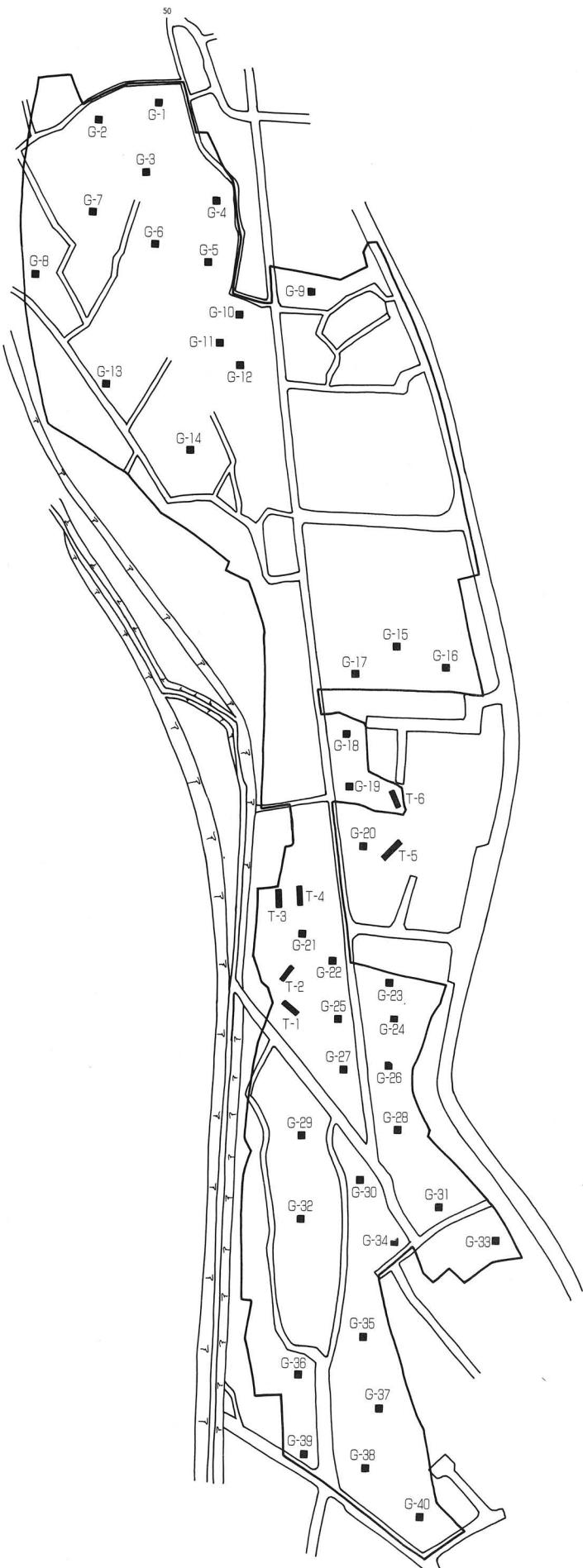


- 1.深沢A(古墳) 2.深沢B(繩文) 3.深沢C(繩文) 4.末法(古墳) 5.深沢D(繩文) 6.金の尾(繩文・弥生・古墳)
7.御岳田(古墳・平安・中世) 8.泉尻A(古墳) 9.泉尻A(弥生・古墳・中世) 10.村上A(古墳) 11.村上B(古墳) 12.村上C(古墳) 13.村上D(平安・中世) 14.村上E(平安・近世) 15.村上F(古墳・中世) 16.中沢A(平安) 17.中沢B(繩文) 18.中沢C(平安) 19.大下条第1(古墳) 20.大下条第2(古墳) 21.大下条第3(古墳) 22.大下条第4(古墳・平安) 23.大下条第5(古墳・平安) 24.大下条第6(平安) 25.中沢D(古墳) 26.中沢E(古墳) 27.大下条第7(古墳・平安) 28.大下条第8(古墳) 29.大下条第9(古墳) 30.大下条第10(古墳) 31.大下条A(古墳・平安) 32.大下条B(古墳) 33.大下条C(古墳・平安) 34.冷田A(古墳) 35.冷田B(古墳) 36.大下条D(古墳) 37.冷田C(古墳・平安) 38.冷田D(古墳) 39.冷田E(繩文・古墳) 40.村上G(古墳) 41.中沢F(繩文・古墳) 42.中沢G(古墳) 43.村上H(古墳) 44.村上I(平安) 45.村上J(古墳) 46.村上K(平安) 47.寺前(繩文) 48.御証作A(繩文・古墳) 49.御証作B(奈良) 50.松の尾(古墳・平安) 51.松の尾A(古墳・奈良・平安) 52.松の尾B(古墳) 53.松の尾C(奈良) 54.御岳田A(古墳) 55.三味堂A(平安) 56.三味堂B(奈良・平安) 57.冷田F(古墳) 58.宮地西A(古墳・奈良) 59.宮地西B(古墳・奈良) 60.不動ノ木A(繩文・古墳) 61.不動ノ木B(奈良・平安) 62.不動ノ木C(古墳・奈良) 63.前田A(古墳) 64.金ノ宮A(奈良・平安) 65.前田B(奈良) 66.日ノ詰(古墳) 67.中更(平安) 68.塚田A(繩文・古墳・奈良) 69.塚田B(繩文・中世) 70.塚田C(繩文・奈良) 71.塚田D(繩文・古墳・平安) 72.大庭A(古墳) 73.大庭B(奈良) 74.大庭古墳(古墳円墳) 75.山宮地A(奈良・平安) 76.塚田E(奈良・平安) 77.山宮地B(繩文・古墳) 78.山宮地C(平安) 79.石原田A(繩文) 80.続村(奈良・平安) 81.石原田B(古墳・奈良) 82.金ノ宮B(繩文) 83.原A(奈良・平安) 84.天狗沢瓦窯跡(奈良) 85.笹原(奈良・平安) 86.上峯A(平安) 87.北川第1(平安) 88.上峯B(奈良・平安) 89.西ノ原A(中世) 90.上峯C(奈良) 91.原B(奈良・平安) 92.北川第2(奈良・平安) 93.大塚(繩文) 94.大塚古墳(古墳円古墳) 95.宇内藪A(奈良) 96.内藪B(古墳) 97.村東A(古墳) 98.村東B(古墳) 99.村東C(平安・中世) 100.村東D(平安) 101.上ノA(近世) 102.峯A(奈良・平安) 103.西ノ原B(繩文・平安) 104.宮前A(繩文・奈良) 105.峯B(繩文) 106.峯C(中世) 107.村元(繩文) 108.宮前B(平安) 109.上ノ段B(繩文) 110.上ノ段C(繩文) 111.米草(繩文) 112.山之神(中世) 113.鴨塚(平安) 114.御藏(古墳・平安) 115.天神北(古墳・平安) 116.天神西(古墳) 117.榎田(弥生・古墳・奈良・平安) 118.跡部(古墳) 119.西大坂A(繩文) 120.西大坂B(平安) 121.塚本(古墳) 122.音羽(弥生・古墳・奈良・平安) 123.神田(弥生・古墳・奈良・平安) 124.金塚西(繩文・古墳) 125.穴塚古墳(古墳・円墳) 126.平石(平安) 127.豆田(中世) 128.前田(中世)

第1図 周辺の遺跡



第2図 周辺の地形 (★=調査地点)



番号	大きさ	深さ	遺物
G- 1	2.0×2.0	1.7	土器
G- 2	2.0×2.0	1.2	—
G- 3	2.0×2.0	1.2	—
G- 4	2.0×2.0	1.7	—
G- 5	2.0×2.0	1.3	江戸時代磁器
G- 6	2.0×2.0	1.5	土師器・須恵器
G- 7	2.0×2.0	1.7	—
G- 8	1.5×1.5	0.7	—
G- 9	1.5×1.5	0.9	—
G- 10	2.0×2.0	1.4	—
G- 11	2.0×2.0	1.6	—
G- 12	2.0×2.0	0.8	須恵器
G- 13	2.0×2.0	1.1	—
G- 14	2.0×2.0	1.6	—
G- 15	2.0×2.0	1.0	土器
G- 16	2.0×2.0	1.6	土器
G- 17	2.0×2.0	0.9	土器・陶器
G- 18	3.0×2.5	1.3	—
G- 19	1.8×1.8	1.2	—
G- 20	2.0×2.0	1.1	—
G- 21	1.5×1.5	1.6	—
G- 22	1.8×1.8	1.7	—
G- 23	2.0×1.5	1.5	土器
G- 24	1.7×2.0	1.5	—
G- 25	2.0×2.0	2.3	—
G- 26	1.5×1.5	1.5	江戸時代磁器
G- 27	1.5×1.5	1.2	諸磯式土器
G- 28	1.5×1.5	1.7	土器
G- 29	1.5×1.5	1.1	—
G- 30	1.5×1.5	2.3	—
G- 31	耕作中につき発掘せず		
G- 32	1.5×1.5	1.3	—
G- 33	1.5×1.5	2.4	—
G- 34	耕作中につき発掘せず		
G- 35	2.0×2.0	0.8	—
G- 36	1.5×1.5	0.7	—
G- 37	1.5×1.5	1.0	—
G- 38	1.5×1.5	0.7	—
G- 39	1.5×1.5	1.1	—
G- 40	2.0×2.0	1.6	—
T- 1	8.0×2.0	2.0	—
T- 2	7.0×2.0	1.3	—
T- 3	7.0×7.7	1.2	染付・青磁・陶器
T- 4	7.0×2.0	1.2	—
T- 5	8.5×2.0	0.4	—
T- 6	2.0×2.5	0.6	—

第3図 試掘調査位置図

この調査結果を基に、平成12年同年7月11日から同8月29日まで発掘調査を実施した。

第3節 調査方法

発掘調査はトレンチ調査を基本とし、機械と人力で順次掘り下げ、必要に応じて拡張した。第4図に示すとおり、調査対象地北側隅にA—1杭を設定し、調査区の区画に合わせて東西方向へA～F、北から南へ1～13を設定した。したがって国土座標には一致していないため、図郭に入れた。

調査地は北から1区・2区・3区・4区と区別し、それぞれの調査区で遺構の種類に応じて1番からの遺構番号を付けた（第4図）。

第4節 調査組織

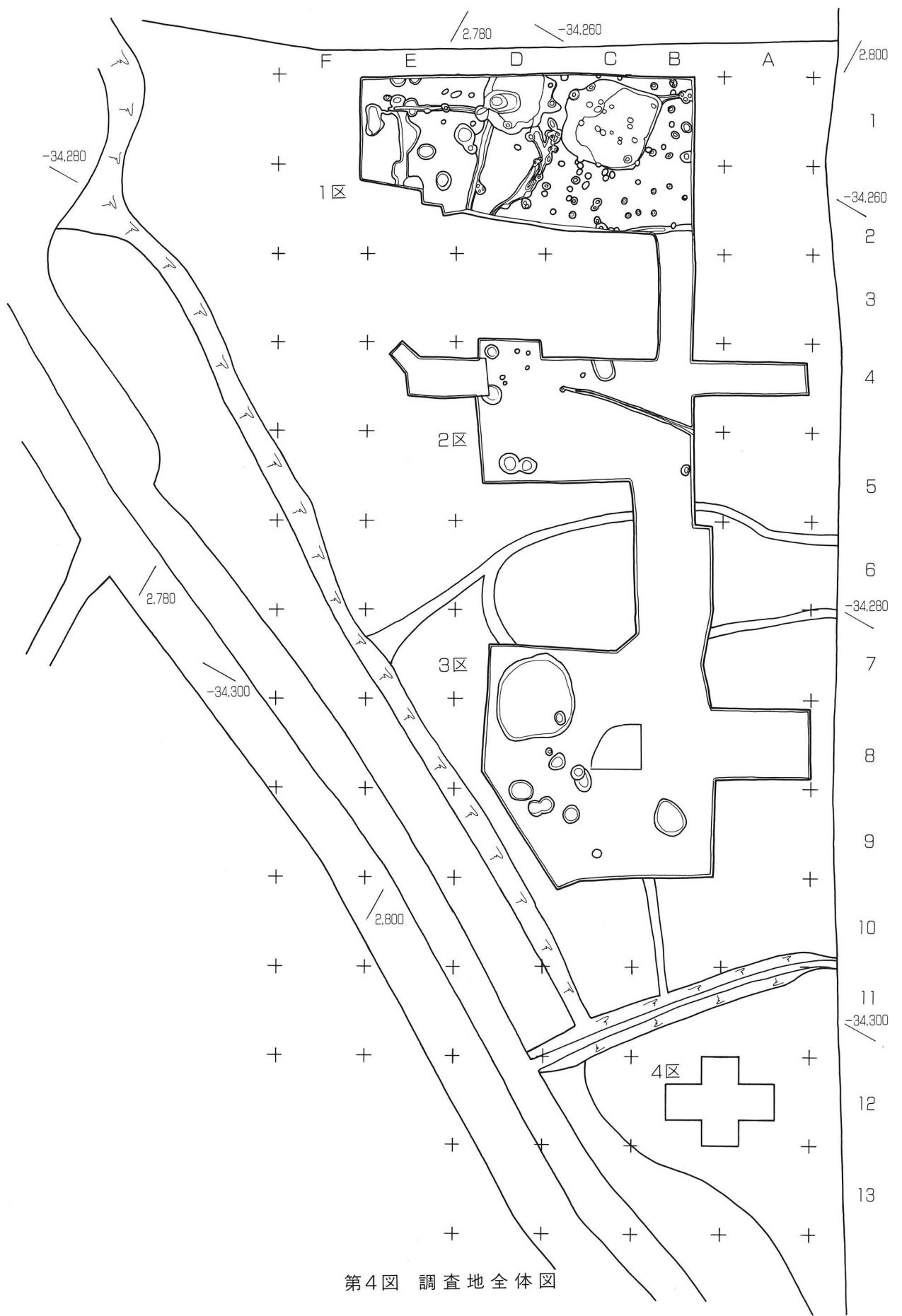
調査主体 甲府市教育委員会

調査担当者 本調査 伊藤正幸（文化財主事）
試掘調査 志村憲一（文化財主事）

協力機関 甲府市山宮町土地区画整理組合

調査スタッフ

[発掘調査]	本道 政清 知見寺照子 岸本 美苗 金井いく代	本道 歌子 古屋袈裟男 佐田 金子	平沢 則子 鈴木 正文 渡辺百合子	倉田 勝子 川口 格一 武井美知子
[遺物・図面整理]	内藤真千子			



第4図 調査地全体図

第2章 調査成果

第1節 概要

今回の調査では1区中世、3区縄文時代前期という対比を示した。1区から2区へ、2区から3区へとそれぞれ連続するトレンチ内部からは時代の移行を示す資料は検出されず、1区を深掘りしても下層は河原石の堆積が見られるのみで、各区域内でも同一の時代の遺物が検出された。

第2図に示すとおり、北から南へ傾斜し、第1区の遺構面の標高が327.0m前後であるのに対し、第3区では326.0m程で、調査区全体的には1.0m程の比高差が認められる。

第2節 遺構と遺物

1 1区の遺構と遺物

調査面積は167.4m²余り、中世を主体とし、遺構として土壙9基(SK1～8、10)、集石土壙1基(SK9)、溝跡6本(SD1～6)、小豎穴(ピット)113基が確認されている。位置的には調査範囲の中で最も高く、遺構面での標高は326.9m前後を測る。調査区西端(荒川寄)には多くの自然礫(川原石)が堆積していた。

(1) 遺構(第5図)

[土 壙]

1区西側に集中している。いずれも現地表下30cmから検出された。

1号土壙 D1グリッドに位置する。東西90cm、南北80cm、深さ80cmを測る。4号溝及び9号土壙と重複する。出土遺物なし。

2号土壙 D1グリッドに位置する。東西116cm、南北114cm、深さは西側で30cm東側では10cmを測る。出土遺物なし。

3号土壙 E2グリッドに位置する。東西88cm、南北106cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。出土遺物なし。

4号土壙 F1グリッドに位置する。東西114cm、南北86cm、深さ10cmを測る。出土遺物なし。

5号土壙 E1グリッドに位置する。東西82cm、南側を4号溝に、西側を6号土壙に切られていた。深さは10cm。出土遺物なし。

6号土壙 E1グリッドに位置する。東西76cm、南北70cm、深さ15cmを測る。一部4号溝に切られている。出土遺物なし。

7号土壙 E1グリッドに位置する。北半分を石垣により攪乱されている。東西70cm、深さ10cmを測る。遺物は検出されなかった。

8号土壙 E1グリッドに位置する。7号土壙同様、北半分を石垣により攪乱されている。東西88cm、深さ12cmを測る。遺物は検出されなかった。

9号土壙 集石土壙。10号土壙と重複し、北側は石垣により攪乱されている。プランは不正方形を示し、東西370cm、南北(現存)324cm、深さ30cmを測る。南東部分に人頭大前後の石が50個ほど重畠している。土師質土器片、陶磁器片、古銭1点が確認されている(図6図)。



第5図 1区全体図

10号土壙 D 1 グリッドに位置し、9号土壙に重複する。東西200cm、南北130cm、深さ50cmを測る。9号土壙の石の流れ込みが認められるが、遺物は検出されなかった。

[溝 跡]

- 1号溝 B 2 グリッドに位置する。南を石垣により攪乱されていた。検出部分で長さ400cmを測る。方向はN—120°—Wで一部二股に分かれる。断面はU字を示す。遺物は検出されていない。
- 2号溝 D 1 グリッドからD 2 グリッドに円弧状に至る。南端部は石垣により攪乱される。現存部分で長さ600cm、最大幅は60cmを測る。C 1 グリッド内で二股に分かれ途切れる。部分的にはU字の断面形を示すが、小豎穴などの重複が多く、底面から壁面にかけて凹凸が激しい。遺物は検出されなかった。
- 3号溝 D 1 グリッドからD 2 グリッドに続く直線的な溝である。南端を石垣により攪乱され、北端部は9号土壙で壊される。長さ600cm、幅40cm程でN—17°—Wを向く。断面はU字を示すが、底面・壁面とも凹凸が多い。遺物は検出されなかった。
- 4号溝 D 1 グリッドからD 2 グリッドに至る。3号溝に直行する形で作られていた。東端を1号土壙に壊され、西側で5号土壙を壊している。長さ460cm、幅30cmを測り、方向はN—60°—E。断面はU字を示す。遺物は検出されなかった。
- 5号溝 E 1 グリッドからE 2 グリッドに至る。4号溝に直行し、南端部は石垣によつて攪乱されていた。長さ330cm、幅30cmを測る。方向はN—30°—W。遺物はない。
- 6号溝 B 1 グリッドに認められる小さな溝跡である。長さ110cm、幅30cmを測りN—55°—Eを向く。断面形状はU字状を呈する。遺物は検出されていない。

[小豎穴] (ピット)

114基の小豎穴が確認された。調査区東部に集中している。直径20cm～50cm、深さ15cm～50cmとまちまちで、大きさ、深さともに規則性は認められない。

この小豎穴群の中でも、B 1 グリッドからC 1 グリッドにかけて確認された、貼り床状の堅い面の直下に検出された小豎穴（網掛け部分）は、他の小豎穴とは時代的に異なっている。小豎穴中の遺物は皆無である。

(2) 遺物 (第7図)

9号土壙から出土している。土器5点、灰釉陶器2点、青磁1点。古銭1点である。

[土師質土器]

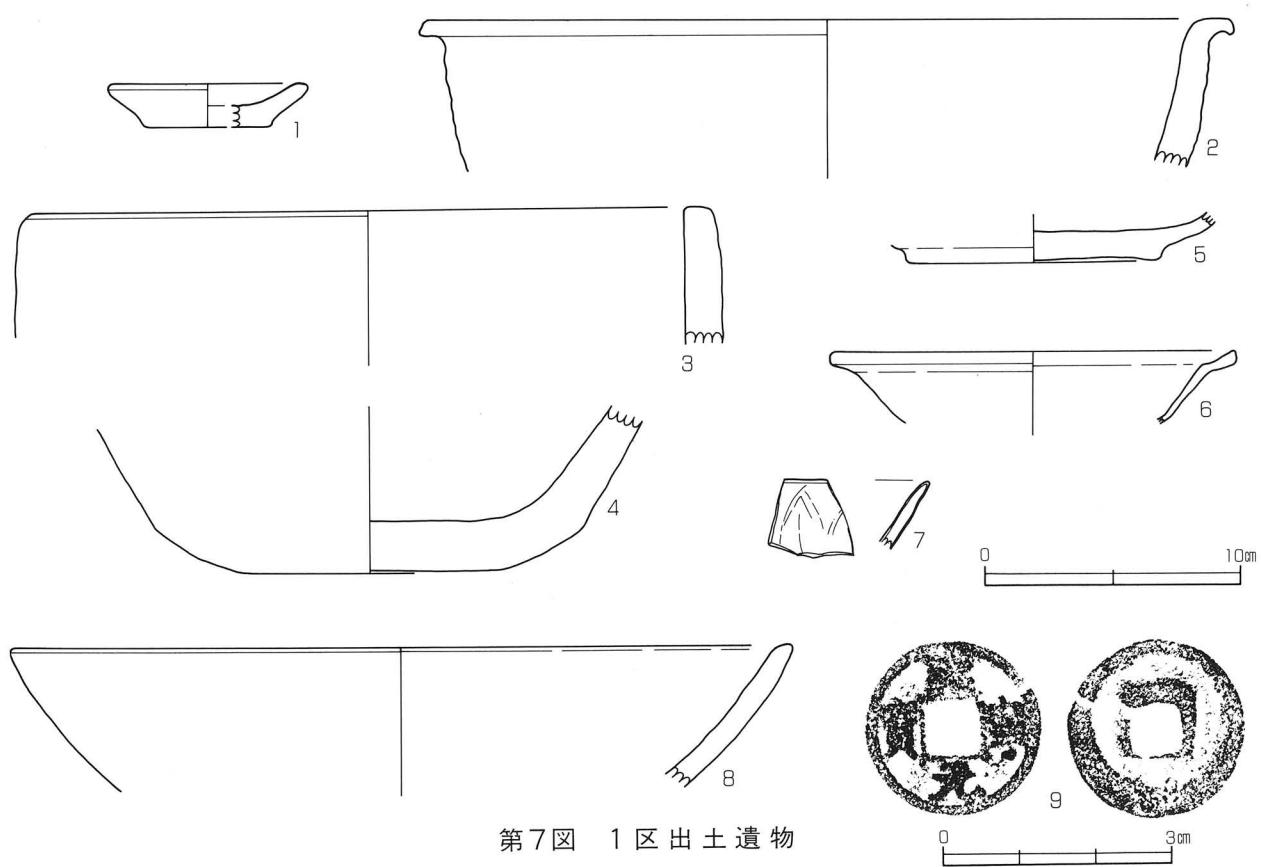
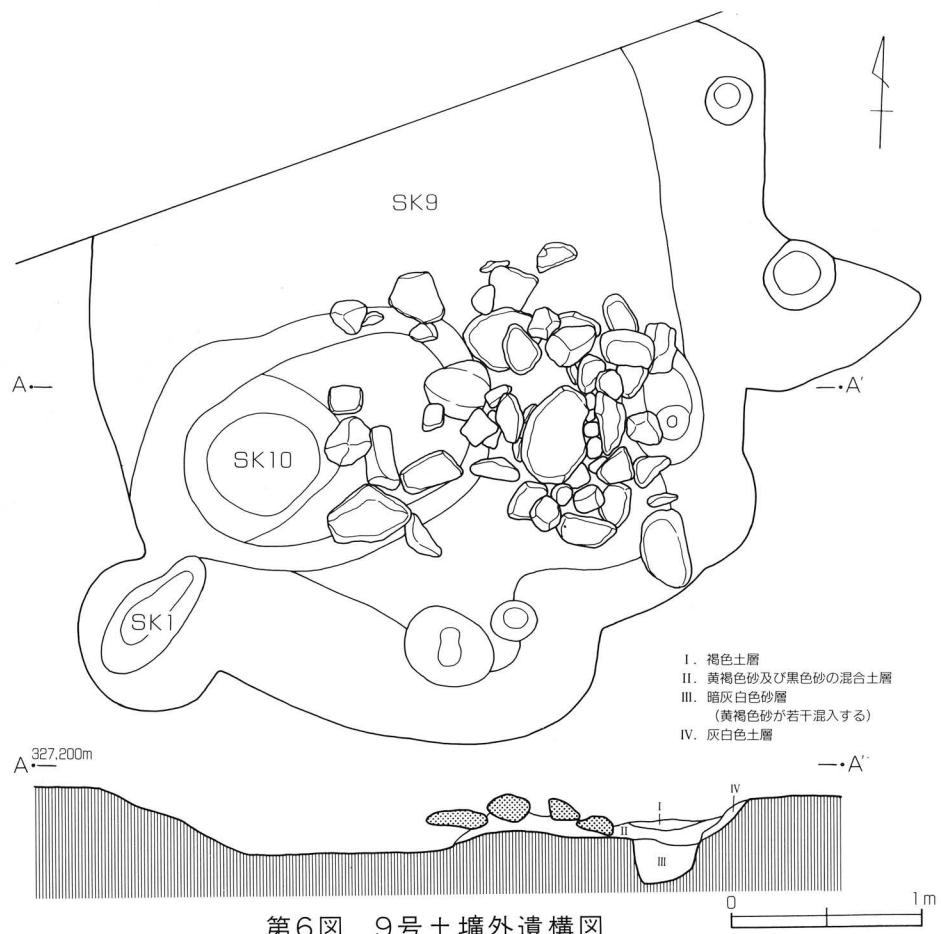
1はロクロ整形の痕跡が認められる、推定口径5.5cmの小型の皿である。胎土は粗く焼成も悪い。2及び4は土製の鍋であろう。ともに外面は火熱を受けた痕跡が認められる。胎土は粗く焼成も悪い。集石上部から検出された。

[陶 磁 器]

7は青磁の口縁部の破片である。外面に鎬蓮弁文様が認められる。胎土は緻密で焼成も良好である。13世紀中葉の竜泉窯系B 1類に比定される。6及び8は灰釉陶器の口縁部の破片である。胎土は緻密で焼成も良好である。表面及び内面の一部に若干釉が認められる。

[古 錢]

熙寧元寶（北宋銭 1068年初鑄）である。北壁際から検出された。表面・裏面とも摩耗が著しい。



2 2 区の遺構と遺物

2 区では細い溝跡 1 本及び土壙 5 基、小堅穴（ピット）7 基が検出された（第 8 図）。遺構面から重機の爪跡が確認され、部分的に攪乱を受けたことが明らかである。

[土 壙]

- 1 号土壙 D 5 グリッド中に確認された。東西 92cm、南北 88cm のほぼ円形を呈し、深さは 22cm を測る。2 号土壙と一部重複している。遺物は確認されていない。
- 2 号土壙 D 5 グリッド中に位置する。東西 114cm、南北 120cm のほぼ円形で、深さは 30cm を測る。遺物は確認されていない。
- 3 号土壙 D 4 グリッド中に確認された。東西 114cm、南北 108cm の円形を呈し、深さは 30 cm を測る。遺物は確認できなかった。
- 4 号土壙 D 4 グリッド中に確認された。東西 76cm、南北 80cm のほぼ円形を呈し、深さは最深部で 32cm を測る。遺物は確認されていない。
- 5 号土壙 C 4 グリッド中に確認された。北側は石垣により攪乱を受けている。東西 128cm の不正方形を呈し、深さは 15cm を測る。遺物は確認されていない。

[その他の遺構]

- 1 号溝跡 B 4 グリッドから C 4 グリッドにかけて検出された。長さ 760cm、幅は最大で 40 cm、深さは最深部で 17cm を測る。方位は N—80°—E で、浅い U 字状からレンズ状の断面形を呈し、C 4 グリッド内で消滅する。遺物は検出されていない。
- 小堅穴 小堅穴は 7 個確認されている。大きさはまちまちで並び方にも規則性は認められなかった。

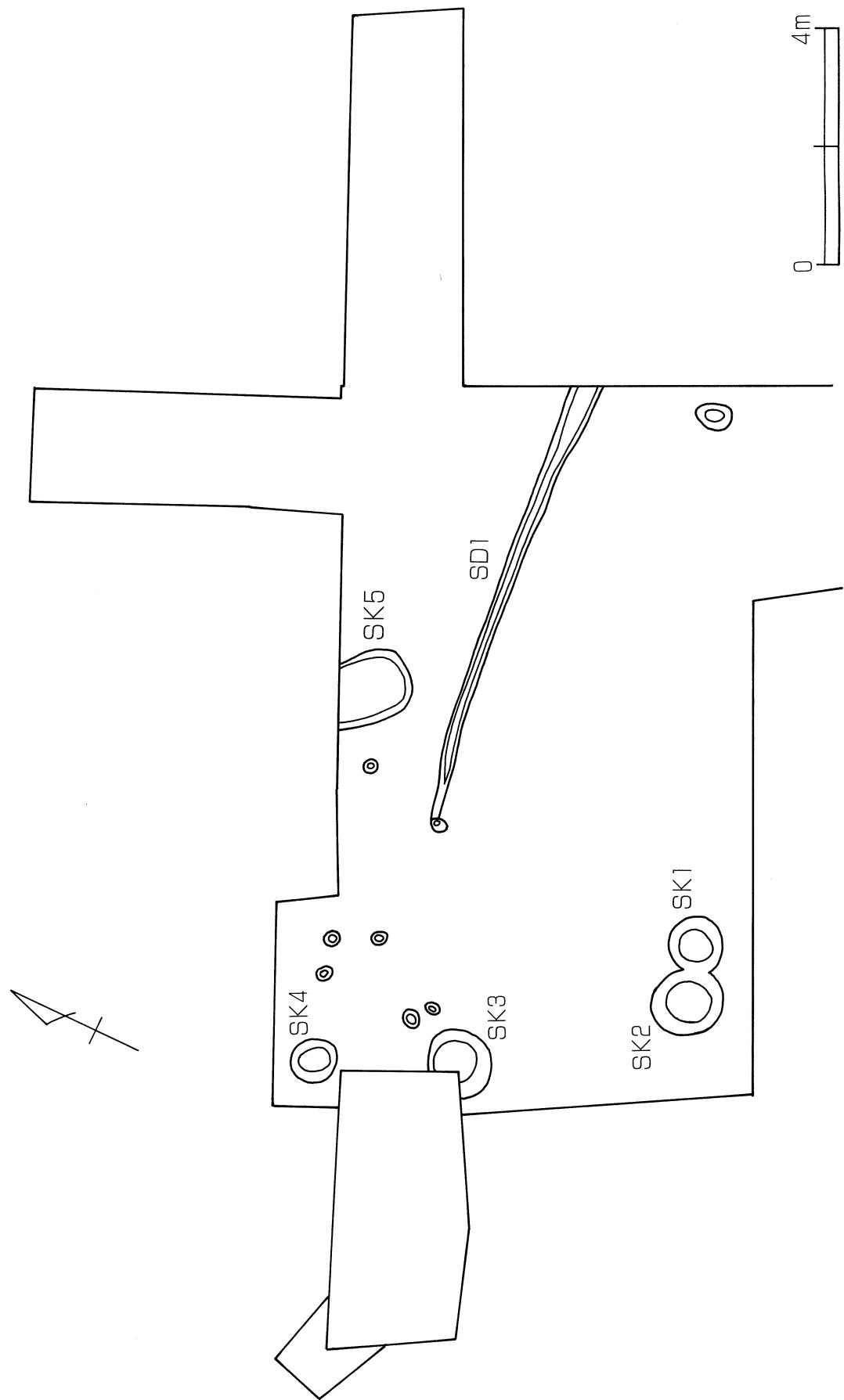
3 3 区の遺構と遺物

調査面積は 200m²余り、縄文時代前期の調査区で、遺構として土壙 10 基（SK 1 ~ 10、うち 1 基は集石遺構）と性格不明遺構（SX 1）が確認された（第 9 図）。

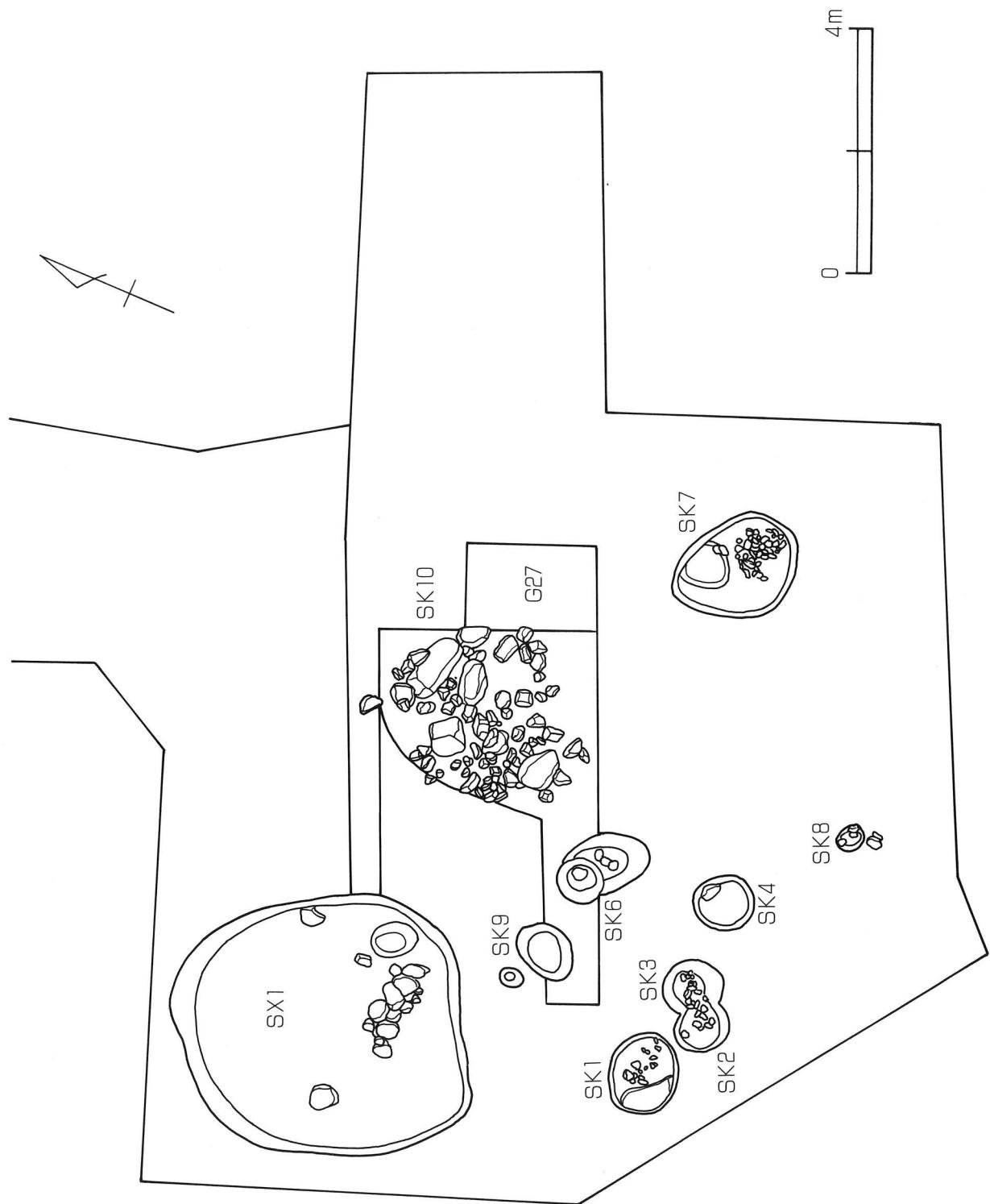
(1) 遺構

[土 壙] (第 10~12 図)

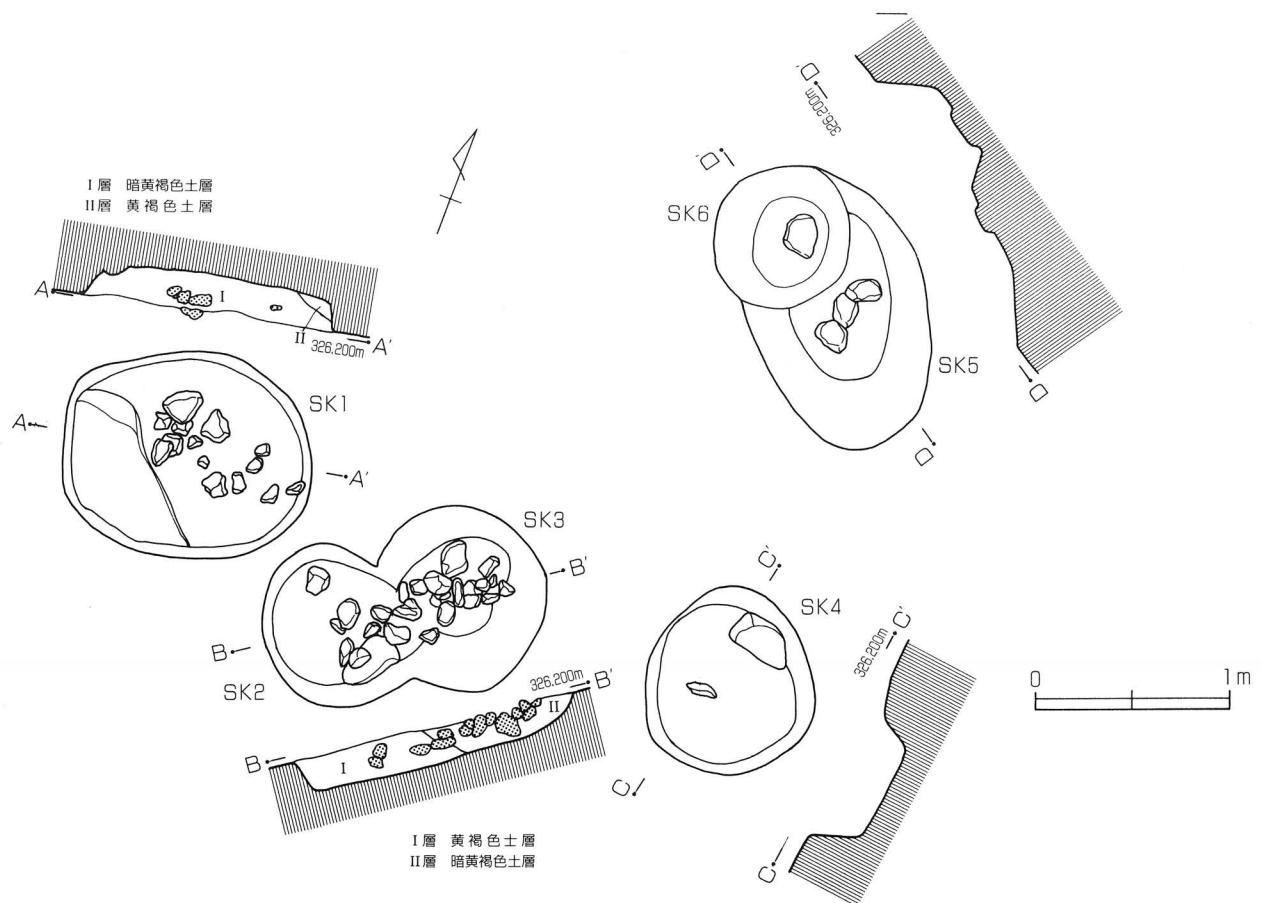
- 1 号土壙 D 9 グリッドから検出された。長径 136cm、短径 112cm の橢円形で、深さは 20cm 程である。人頭大の礫が混ざり込み、諸磯式土器と混在する。
- 2 号土壙 D 9 グリッドから検出された。東側を 3 号土壙に切られる。長径 90cm、短径 78 cm、深さ 21cm を測る。人頭大の礫とともに、諸磯式土器が確認された。
- 3 号土壙 C 9 グリッド中から検出された。西側の掘り込みで 2 号土壙を切っている。長径 100cm、短径 80cm、深さ 10cm を測る。2 号土壙同様、人頭大の礫とともに諸磯式土器が検出されている。
- 4 号土壙 C 9 グリッド中から検出された。長径 100cm、短径 92cm、深さ 25cm を測る。礫が 2 つ確認されたのみで、遺物は検出されなかった。
- 5 号土壙 C 8 グリッド中から検出された。西側を 6 号土壙により切られている。短径 102 cm、長径 140cm、深さ 20cm を測る。遺物は検出されていない。
- 6 号土壙 C 8 グリッド中にあり、5 号土壙を切っている。長径 80cm、短径 74cm、深さ 25 cm を測る。諸磯式土器が検出されている。



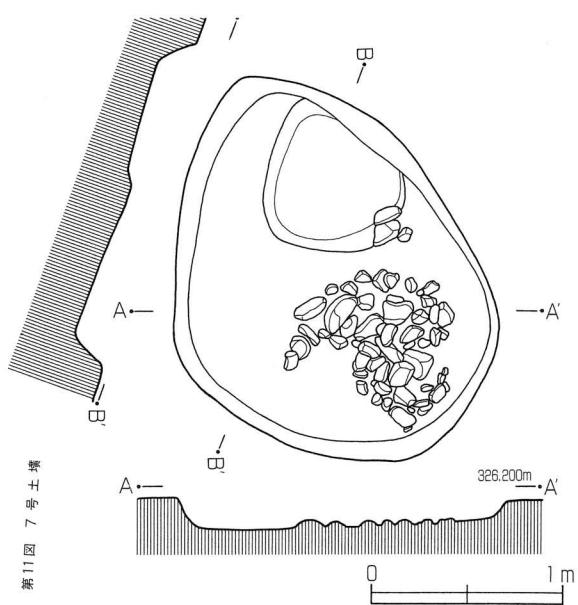
第8図 2区全体図



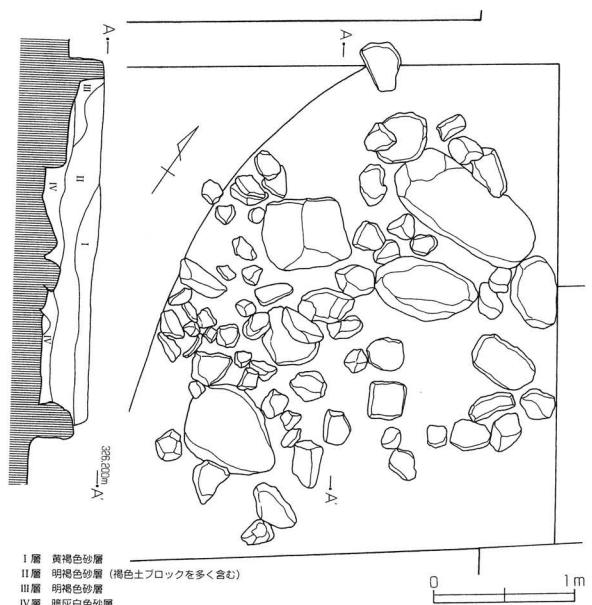
第9図 3区全体図



第10図 3区土壤 (SK1～SK6)



第11図 7号土壤



第12図 10号土壤

7号土壙 B 9 グリッド内から確認された。長径222cm、短径162cmの楕円形で部分的に拳大から人頭大の礫が重疊しており、集石土壙の可能性を示している。諸磯式土器が確認されている。

8号土壙 C 9 グリッド中に検出された。長径46cm、短径44cmのほぼ円形で、深さ10cmを測る人頭大の礫とともに諸磯式土器が横位で確認された。

9号土壙 C 8 グリッド中から検出された。長径108cm、短径78cm、深さ50cmを測る。諸磯式土器を埋設し、内部に拳大から人頭大の礫を充填した痕跡が認められる。

10号土壙 集石土壙。北西の壁のみ検出されたが、東側の一部は試掘坑により攪乱されている。自然礫が無数に重疊しており、その中から諸磯式土器及び玦状耳飾りが検出された。

[性格不明遺構]

D 8 グリッドを中心に検出された。長軸474cm、短軸424cmの不正方形のプランを呈し、掘り込みは46cmを測る。南側内部に小竪穴（柱穴）が1基検出された。遺物の出土量は多いものの炉跡や貼り床等、住居跡に付随する施設は確認できなかったため性格不明遺構とした。有孔土器を始め、諸磯b式土器が多数検出されている。

(2) 遺物

縄文土器（諸磯b式）、石器（石鏃、玦状耳飾、磨石）、土製模造品が確認された。

[土 器]

図示した57点の土器を、器形及び文様によって次のとおり分類した。

- 1類 深鉢(A) 縄文のみを使用して施文するもの（第13・14図）
- 2類 深鉢(B) 浮線文を用いるもの（第15図）
- 3類 深鉢(C) 沈線により文様を描くもの（第16図）
- 4類 有孔土器及び浅鉢（第17・18図）
- 5類 他地域の影響が認められるもの（第19図）

1 類 器体全面に縄文を施す。口縁部は内湾し、2対4単位の波状を示す。このうち1及び3は波頂部にボタン状突起が認められる。ともに性格不明遺構（SX1）からの出土である。2は10号土壙からの出土であるが、ボタン状突起は認められず、胴部の屈曲も認められない。4は調査区一括の遺物で、口唇部にきざみを持つ土器である。また5及び6の土器は、縄文の地文に円形竹管文を付けている。

第14図は底部である。不明瞭ながら若干縄文が認められる。

2 類 浮線文を貼り付け、へら状工具で刻みを付ける。12及び13は4単位の波状口縁を呈するものと思われ、波頂部に明瞭な突起が認められる。13は縄文を地文にしている。12が口縁部文様帯から連続的に胴部へ続くのに対し、13では、口縁部文様帯と胴部文様帯とを一度区切っている。ともにSX1からの出土である。

16は口縁部であるが、外反し波状を呈する。浮線（隆帶）にヘラで刻みを付けるが、不明瞭である。遺構外から出土した。14はSX10から出土した口縁部である。口唇部に刻みを付け、浮線及びヘラで付けられた刻みは明瞭である。

3 類 文様の構成が沈線によるもの。23は8号土壙からの出土土器である。キャリパー状に屈曲する口縁部で、口唇部には2個で1単位とした4単位の突起が認められる。口縁部文様帯及び胴部文様帯上部には水平な平行沈線が、またキャリパー状に屈曲する部分及び胴部中央には斜方向の平行沈線が認められ、最もくびれる頸部直下には擦り消し帯が認められ、「く」の字型に緩く屈曲する。

37は10号土壙から出土した。キャリパー状に内湾し、突起を持つ。口縁部文様帶及び胴部にかかる部分には水平方向の沈線を付し、間に蕨手状の沈線を施す。34は蕨手状の隆帯をそのまま突起にする。下部には同心円状の沈線を施す。

38から43まではいずれも平行沈線の中に爪形の刻みを充填する。41は有孔土器の可能性があるだろう。SX1からの出土である。

- 4 類 孔有土器及び浅鉢形土器及び底部である。性格不明遺構から確認された45の土器は、平行沈線の中に爪形文を充填したものである。屈曲部の上面、下面ともに文様を施し、有孔部分及びその両側はなでつけした結果、微妙に盛り上がった部分にヘラで刻みを入れている。区画された各文様の間は丁寧に磨かれている。

3号土壙出土の有孔土器は無文で胴部下半に屈曲部を持つ(48)。肥大した口唇部上には2本の粘土紐を貼付し、間に垂直方向に孔を開けている。全体的には四分の一弱の残存であるが、孔は1つしか確認されなかった。一括採取された46の土器は、口唇部に細い線の文様が認められる。この土器は肥大した口唇部に沿うように孔を開けている。47は、口唇部が直角に折れ曲がるが、その直下に孔を開けている。有孔土器のバラエティーとして県内でも希有な例である。

- 5 類 他地域からの影響の強い土器をまとめた。54及び55は頸部の屈曲部分かと思われる。粘土紐を貼り付け、はしご状の文様帶を形成する。また56は底部直近の部分であるが、やはり粘土紐を貼り付けはしご状あるいは交差させている。57は縄文の地文に2本単位で平行に粘土紐を貼り付け、その内部の縄文を擦り消している。東海から関西地方の影響かと思われる。

[土製模造品] (第20図)

性格不明遺構から1点のみ確認されている。勾玉を模したものであろうか、一方の端が欠落しているため、詳細は不明である。胎土・焼成ともあまりよくはない。

[石 器] (第20図)

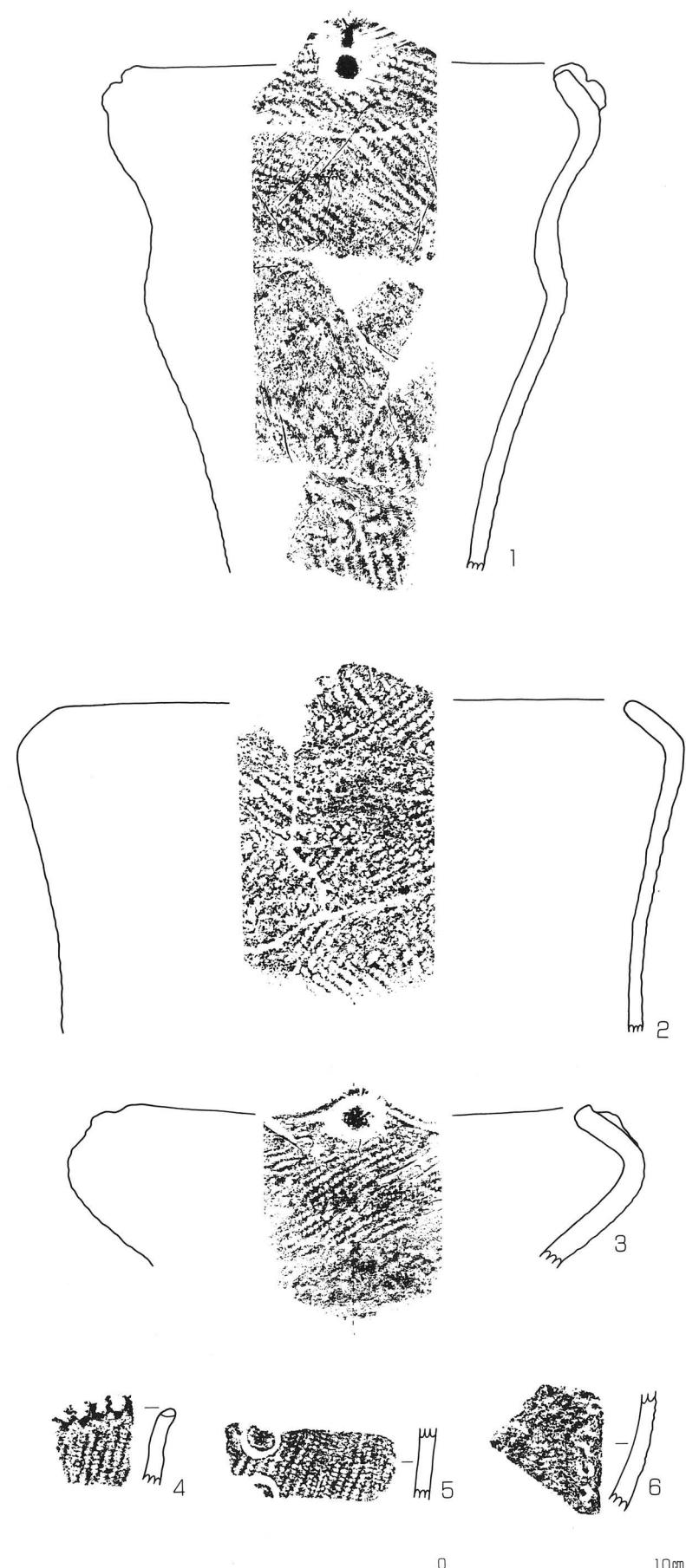
石 鏃 6点が出土した。無茎の石鏃5点はいずれも黒曜石製であり、基部に抉りをいたれた凹基無茎鏃である。2は有茎鏃である。

磨 石 3区サブトレンチ内から1点検出された。中央にくぼみを有し側面を磨りに利用したと思われる。花崗岩製で長径11.0cm、短径5.4cm、厚さ5.5cmを測る。

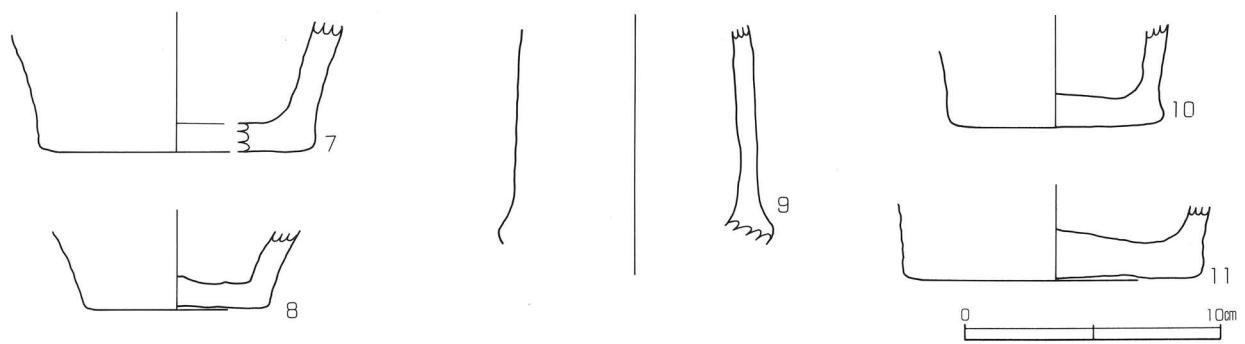
玦状耳飾 10号土壙から検出された。チャート製で半分が欠落する。孔は剥離した面から開けられているが、実測可能な部分では大径5mm、小径3mmを測る。大きさは推定で外径3.6cm、内径が1.4cmを測る。塗彩は施されていない。

4 4区の遺構と遺物

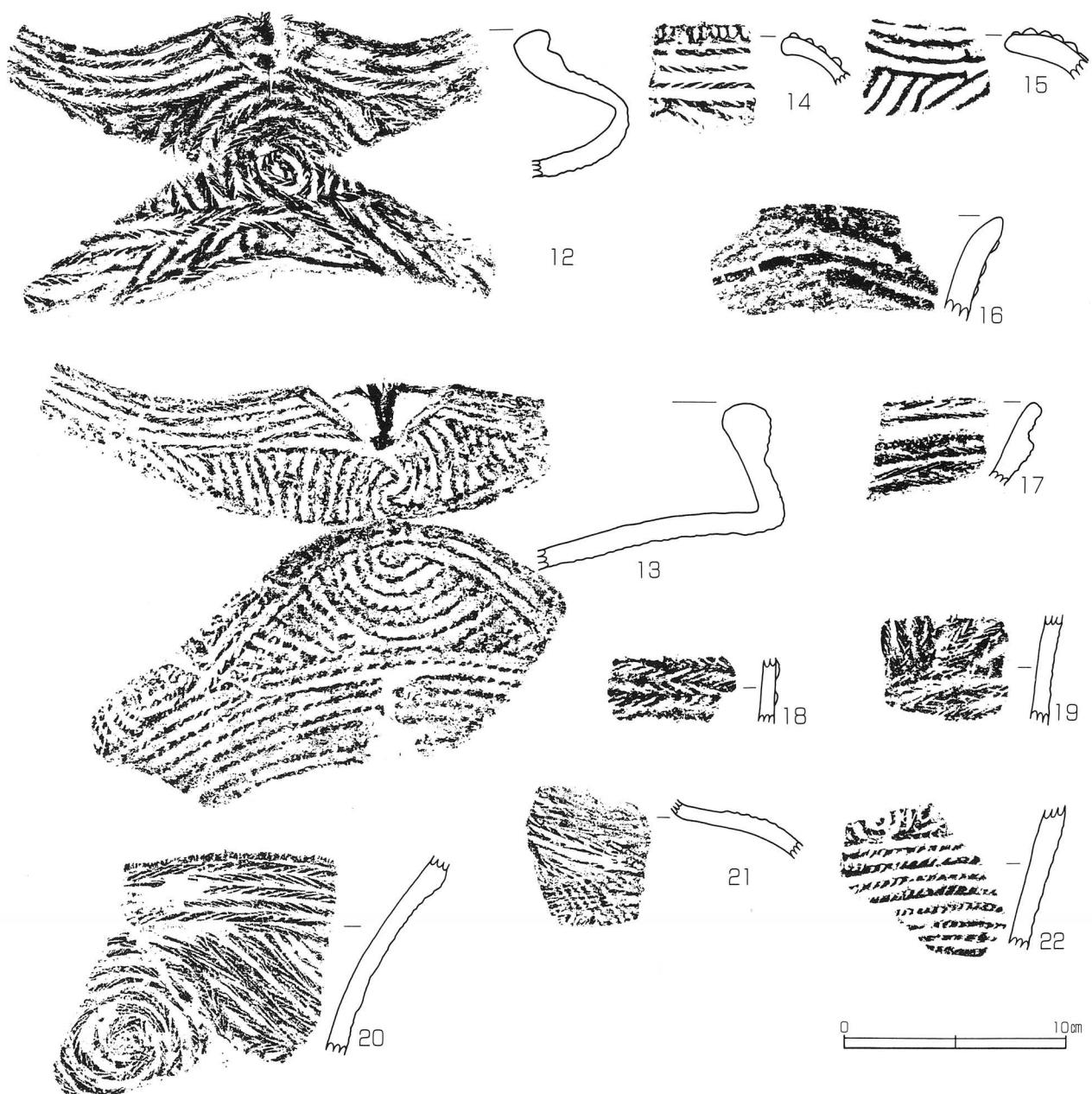
幅2mで十文字にトレンチを入れ調査を実施した。耕作土を除去すると粗砂層になり、以下礫層に達する。遺構面は存在せず、遺物も分布していなかった。



第13図 3区出土土器(1類)



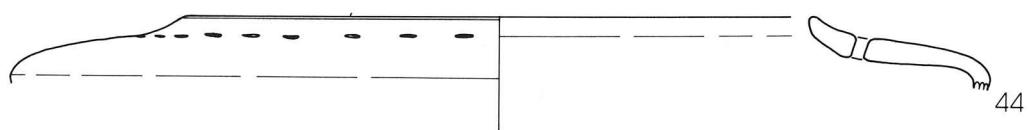
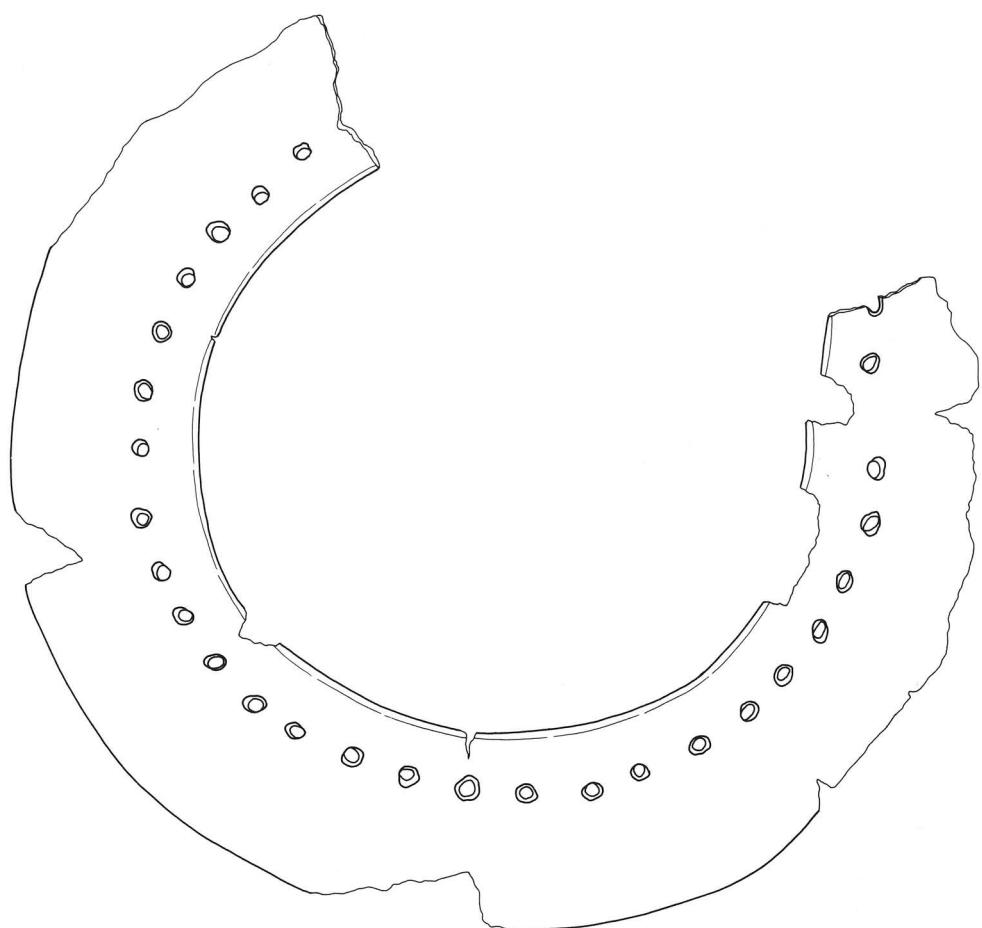
第14図 3区出土土器（底部）



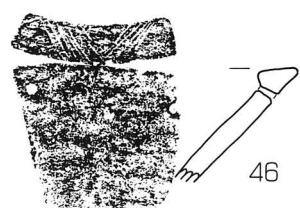
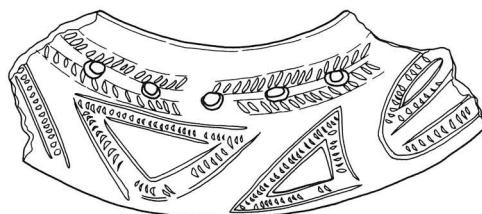
第15図 3区出土土器（2類）



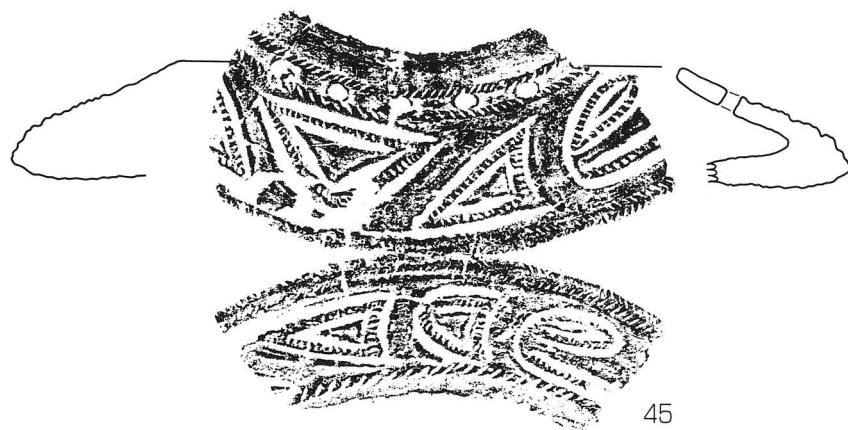
第16図 3区出土土器(3類)



44



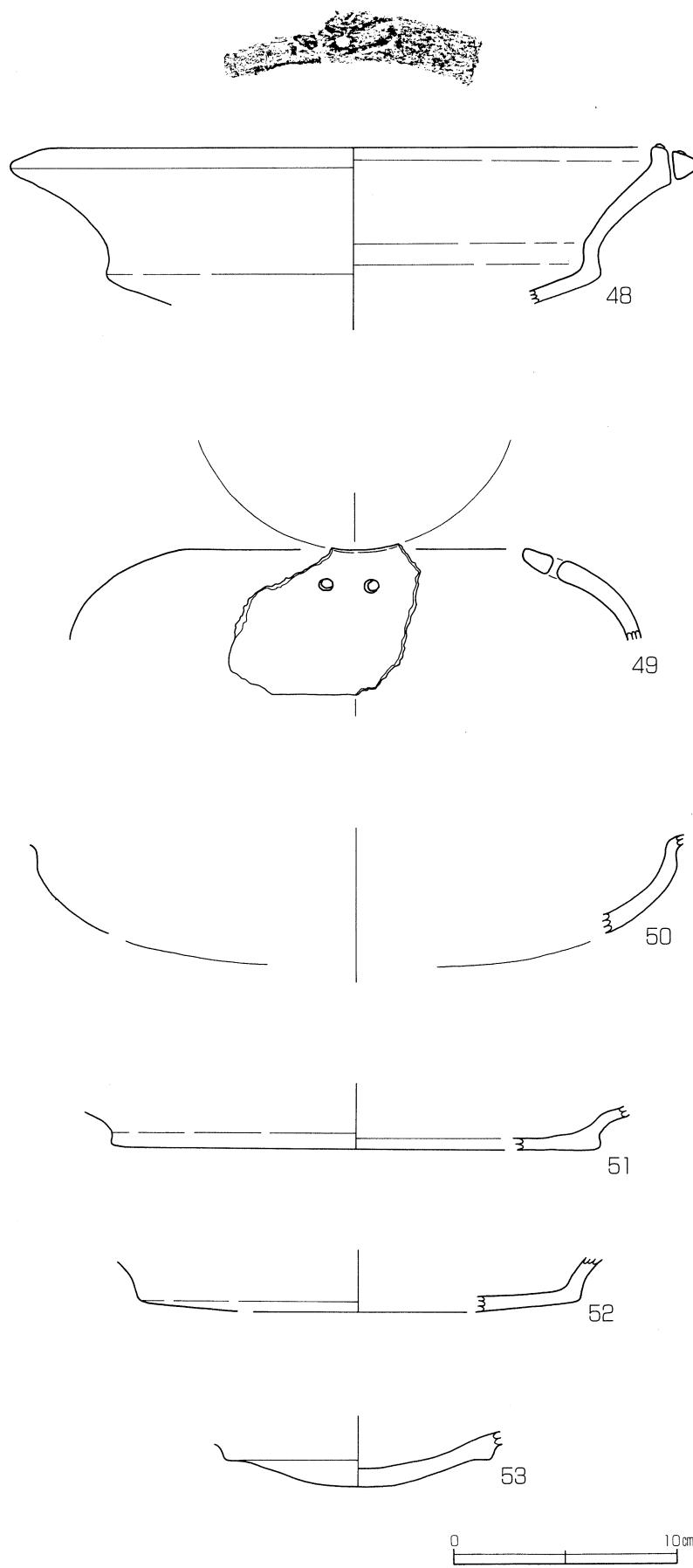
46



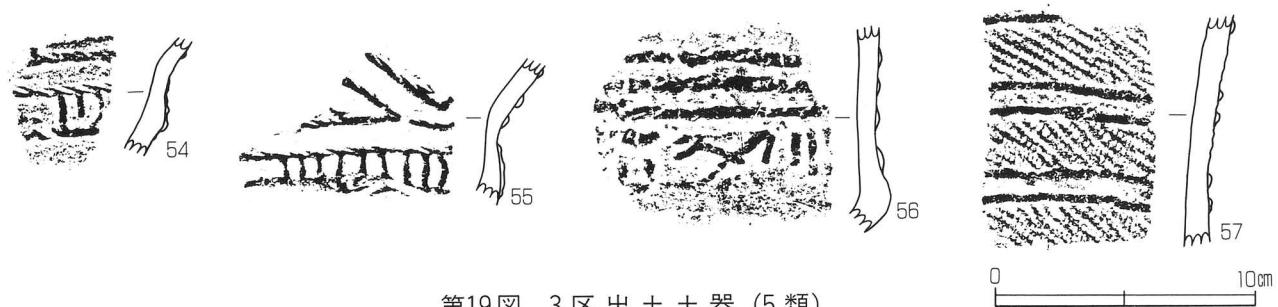
45



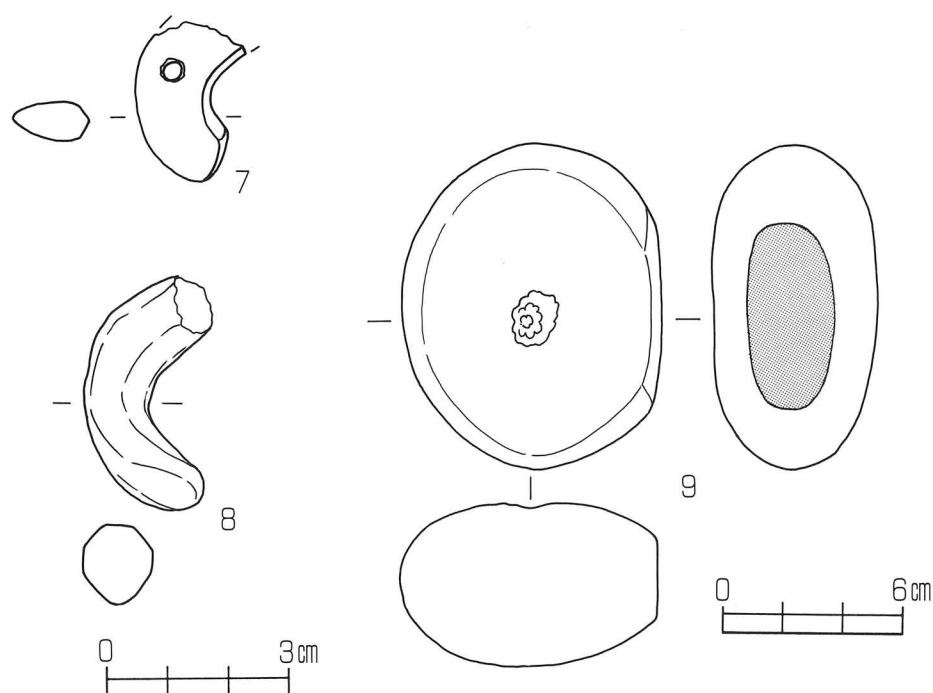
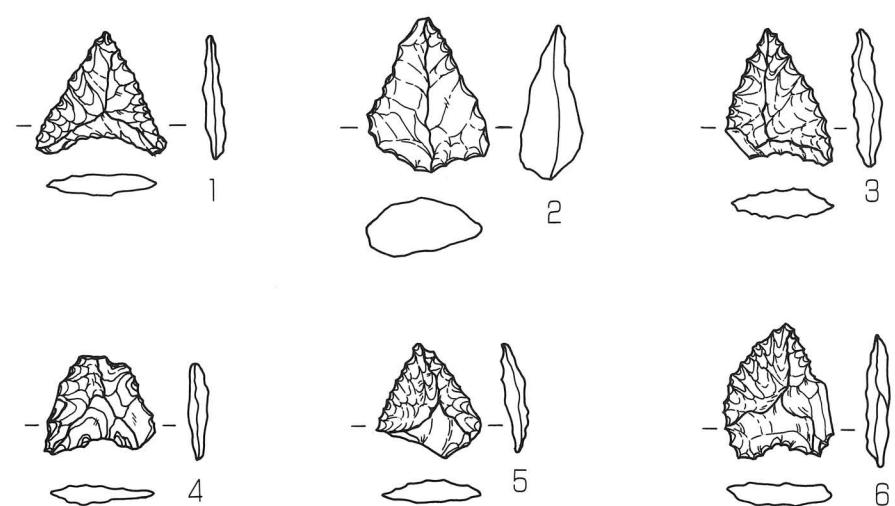
第17図 3区出土土器 (4類)



第18図 3区出土土器（4類）



第19図 3区出土土器 (5類)



第20図 3区出土石器・土製品

第3章 まとめ

第1節 米草遺跡の展開

米草遺跡の範囲は、詳細な試掘調査により北へ延びないことが明らかになった。西側には荒川が障壁になり、また東側は片山の裾野で、比高差80mを測る崖になるため、双方への展開も推測しがたい。

該期の集落の広がりについて『花鳥山遺跡』では、天神遺跡・釈迦堂遺跡と比べて調査面積が格段に少ないとしながら、「花鳥山丘陵は北側に張り出しを持つものの基本的には舌状台地であることが明らかである。この状態で等高線に沿うような形で住居跡群が展開することは、必然的に集落全体とすれば馬蹄形を呈することとなる」とし、最大166mにおよぶ集落展開の可能性を示した(長沢1989)。また大泉村の天神遺跡については「ここでは諸磯b・c式期の住居跡49軒、土壙480基以上が調査されており、住居跡群の内側に土壙群が位置する傾向があり、馬蹄形あるいは環状集落となることが推定される。(中略)集落の西側は深い谷となっており、それによって制限される部分まで集落の展開が想定され、外径は120m~150m程度と考えられている」と一定規模の広がりを示している。米草遺跡も同時期の遺跡として一定規模にその展開を考えられるならば、南及び南東方向への展開を考えざるを得ない。

本遺跡の南及び南東方向に位置する縄文時代の遺跡としては、金塚西遺跡、西大坂A遺跡、西河原遺跡、榎田遺跡、音羽遺跡などをあげることができる。中期から後期に至る遺物が確認されている。このうち本遺跡に距離的に近い榎田遺跡は、平成4年度に山梨県埋蔵文化財センターにより発掘調査が実施され、縄文前期末(十三菩提式)、中期初頭(五領ヶ台式)及び後期(堀之内式)の遺物が報告されているが、遺構から検出されたものは五領ヶ台式土器のみである。

また山梨県埋蔵文化財センターで平成4年に発掘調査された音羽遺跡では、A区及びB区から、遺構外としながらも諸磯b式土器が検出されている。本遺跡からは2.5kmほど南に離れているが、甲府市内の荒川扇状地上で唯一確認される同時期の遺跡になる可能性を秘めている。

所在を敷島町に求めてみると、荒川対岸の大塚遺跡からは、小破片であるが、諸磯b式土器の出土が報告されている。また400mほど南に下った位置からには、諸磯c式土器を出土する塚田遺跡がある。土器形式上、1段階後の編年的位置づけになる。さらに南の松ノ尾遺跡から諸磯c式土器が出土していることが報告されているが、時期的にも位置的にも米草遺跡とのつながりを考えるには無理がある。

ところで、本調査区の中に見られる標高330mの等高線は、片山に沿うように東へ続いていき350mの等高線とともに片山南斜面に舌状台地を形成する。これまで扇状地を見てきたが、この舌状台地の西端に位置すると考えたとき、米草遺跡が山宮団地南端から西甲府病院の方向へ広がる可能性をもっていることがわかる。分布調査及び発掘調査例の増加を待って今後さらに検討していきたい。

第2節 米草遺跡出土の諸磯式土器について

米草遺跡は、諸磯b式期を主体とした遺跡であり、同期の土器がある程度まとまって検出された。これらの土器については前述したとおり、施文用具及び施文方法より分類して

きたが、ここで改めて編年的な位置付けを考える。

新津健氏は天神遺跡から出土した諸磯b式土器の器形に着目し「このような器形の変遷の中で、特に口縁部の屈折による幅の変化が、文様構成に大きい変化をもたらしているものと考えられるが、この傾向は沈線文糸土器に非常に顕著である。」としながら3期に分類し、谷口康浩氏の変遷に当てはめて「天神I段階が谷口氏の第五様式から第六様式、天神II段階が第六様式から第七様式、天神III段階が第七様式となろうか。ここではI段階をb式中段階（新）、II段階をb式新段階（古）、III段階をb式新段階（新）としておきたい。」とした。

一方県内での諸磯式土器の編年研究に係わる最新の文献は、今福利恵氏による『前期後半（諸磯式土器）』かと思われる。この中では「縄文を地文として刻みのある浮線文によって特徴づけられるが、爪形文によって文様が描かれるb1段階、浮線文が盛行するb2段階、沈線文が盛行するb3段階に細分され、さらにb2段階は文様モチーフや器形などからさらに細分される。県内ではb2段階から遺跡数が増え、大泉村御所遺跡、同天神遺跡、花鳥山遺跡などにまとまった資料が見られる。こうした状況から諸磯b式土器をb1、b2古、b2中、b2新、b3に5細分した。』としている。

これらを参考に米草遺跡の土器年代を考えると、深鉢型の土器はいずれもb2（新）段階に当てはめることができるが、浅鉢型の土器（有孔土器を含む）はb2（古）からb2（新）までと若干幅がある。ただ10号土壙出土の34番の土器は、口唇部から沈線で模様付けき、それが自然に隆帯になり、さらに蕨手状に盛り上がって波頂部では突起として機能している。この器形は県内の諸磯式土器の中では初見であろう。

ところで米草遺跡の有孔土器について、孔の位置及び方向については次の3つのパターンを確認することができた。

パターンA 口唇部に縦にあけられるもの

パターンB 口唇部直下にあけられるもの（縦穴か横穴かで細分が可能）

パターンC 口縁部が屈曲する位置に横方向に空けられるもの

パターンAに該当するのは第18図48番で、b2（古）段階に位置付け可能である。パターンCに該当するのが第17図47番であり、口唇部の特徴からb2（古）からb2（中）段階に位置づけられ、他はパターンBにあたる。パターンBはb2（古）からb2（新）まで当てはめることができであろう。パターンBでも46番の土器は、外から中へ上向きにあけられていると言うように、同一パターンの中でも変化は認められる。

県内で見たとき、パターンCに見られるような横方向の穿孔は、塩山市獅子之前遺跡3号住居から出土していて、時期的にはb2（古）段階に置いている。しかしパターンAのように肥大した口唇部を貫通するようにあけられた有孔土器は発見できないし、パターンBの中で、上向きの穿孔も確認できない。

前述したとおり、米草遺跡の浅鉢型土器はb1（古）からb1（新）に至る時期の中で捉えることが可能であり、穿孔方法のパターンはb1（古）の範疇の中に納められる。類例に乏しいため今回は深く踏み込むことはできないが、孔の位置と方向については時期差による変化ではなく、同時期の中でのパターンとして捉えておきたい。

一 参 考 文 献 一

- 『花鳥山遺跡・水呑場北遺跡』山梨県教育委員会・関東農政局笛吹川農業水利事業所 1989
『獅子之前遺跡発掘調査報告書』山梨県教育委員会・山梨県土木部 1991
『遺跡詳細分布調査報告書』敷島町教育委員会 1994
『天神遺跡』山梨県教育委員会 1994
『榎田遺跡』山梨県教育委員会・山梨県住宅供給公社 1995
『音羽遺跡』山梨県教育委員会・山梨県総務部 1997
今福利恵「山梨県の考古学編年(5) 前期後半(諸磯式土器)」『山梨県史』資料編2 1999
『供養寺遺跡 後呂遺跡』東八代広域行政事務組合・中道町・中道町教育委員会 2000



遺跡遠景



1区全景



1区西部近景

図版 2
1 区の遺構(1)
10号土壙



検出状況



遺物検出状況

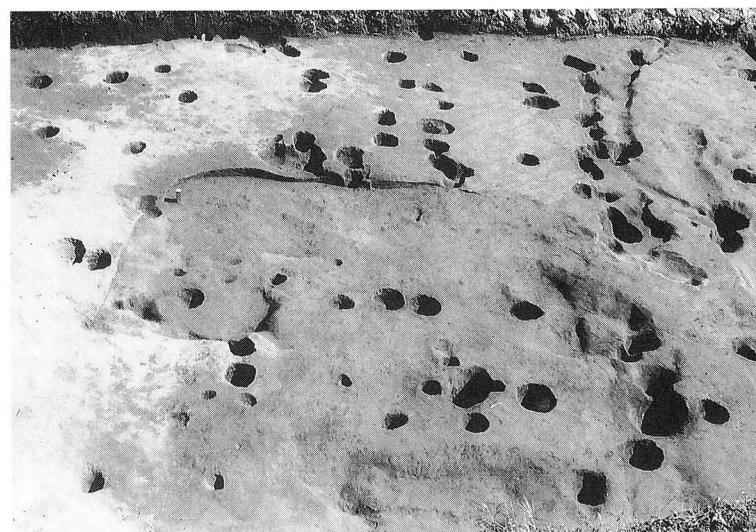
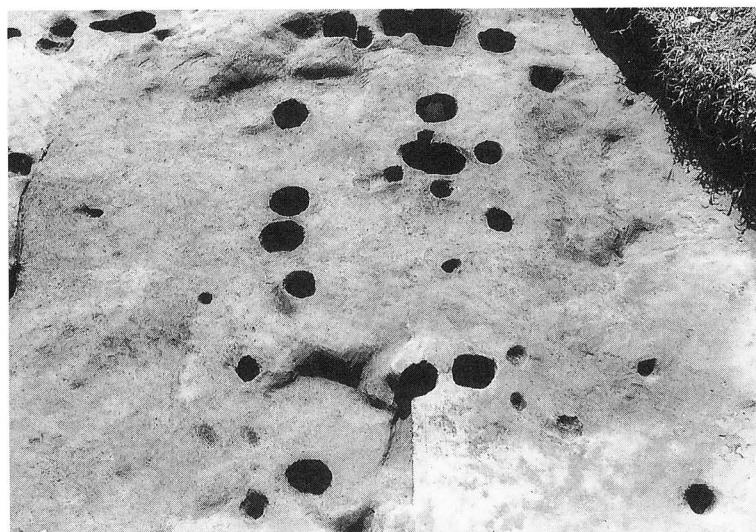
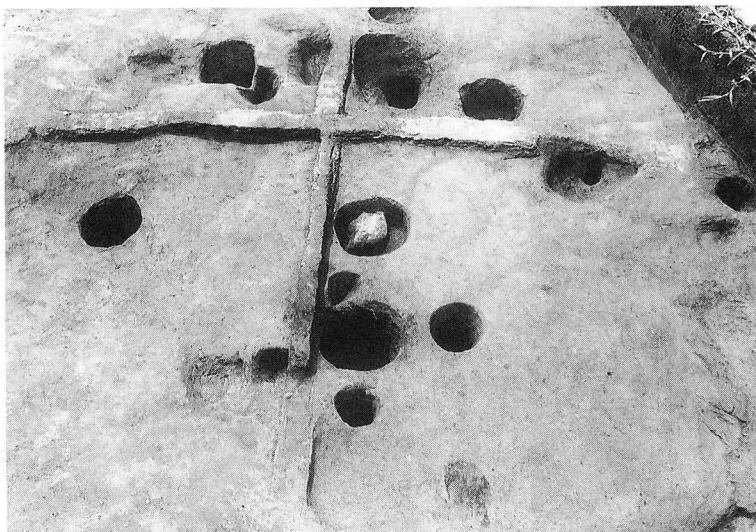


完掘状況

図版3

1区の遺構(2)

1区小豎穴



図版 4
2 区の遺構



2 区東部



2 区西部



2 区 1 ~ 3 号土壙

図版 5
3 区の遺構(I)



1 号土壤



2・3 号土壤

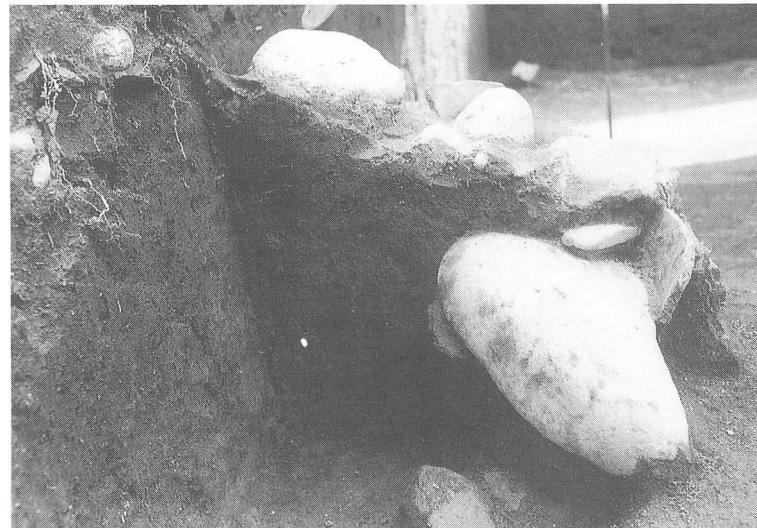


1～3 号土壤完掘状況

図版6
3区の遺構(2)
6号土壙



検出状況

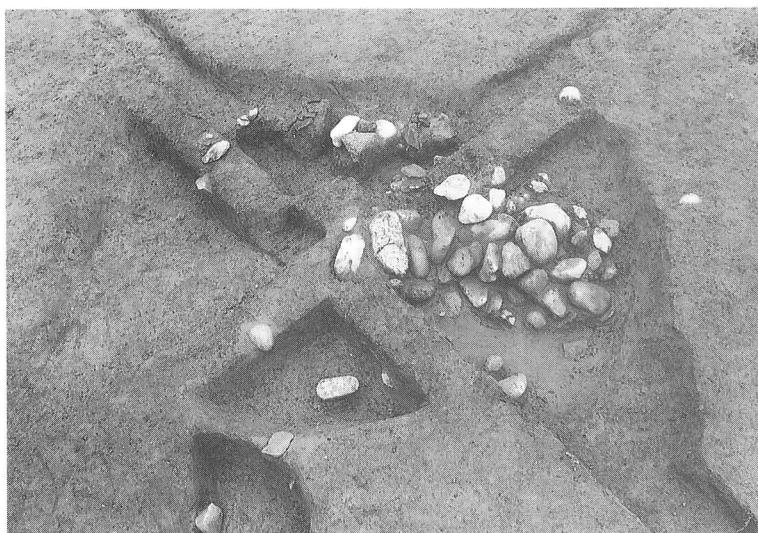


堆積状況



完掘状況

図版 7
3 区の遺構(3)
7 号土壙



検出状況



遺物出土状況



完掘状況

図版 8
3 区の遺構(4)
8 号土壙



検出状況



遺物確認状況①



遺物確認状況②

図版 9
3 区の遺構(5)
10号土壙



検出状況



遺物確認状況①



遺物確認状況②

図版10
3区の遺構(6)
性格不明遺構



確認状況



遺物検出状況①



遺物検出状況②

図版11
4区



検出状況①



検出状況②

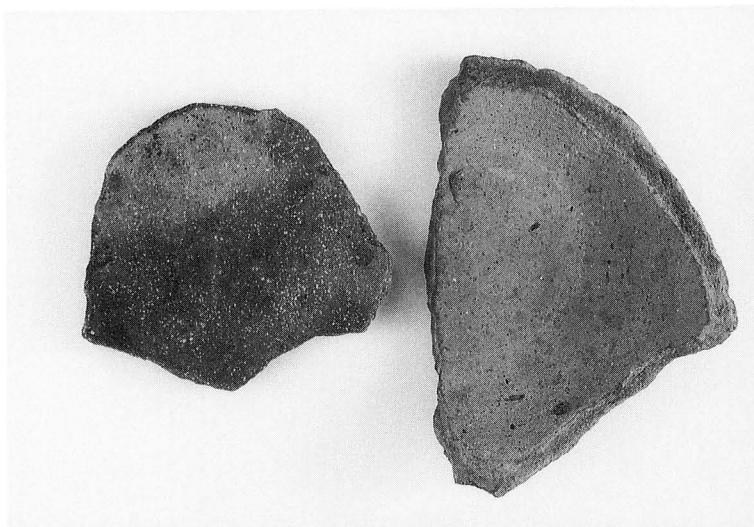


土層確認状況

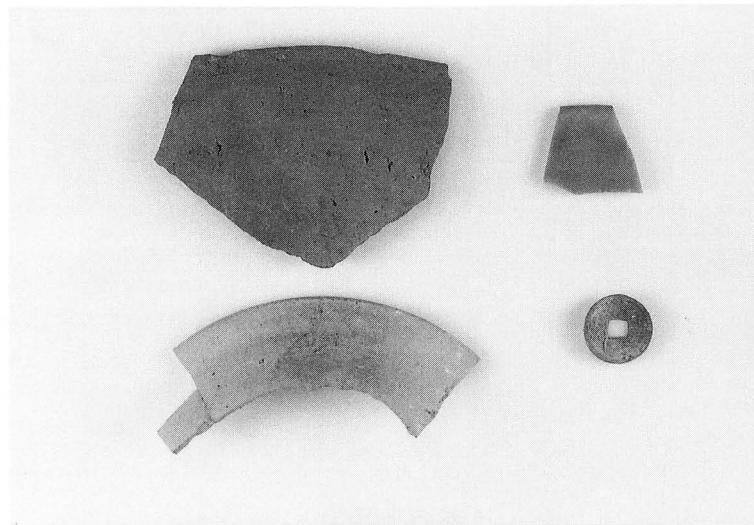
図版12
1区の遺物



土師質土器①



土師質土器②



陶磁器 等

図版13
3区の遺物(1)



1類の土器①



1類の土器②



1類の土器③

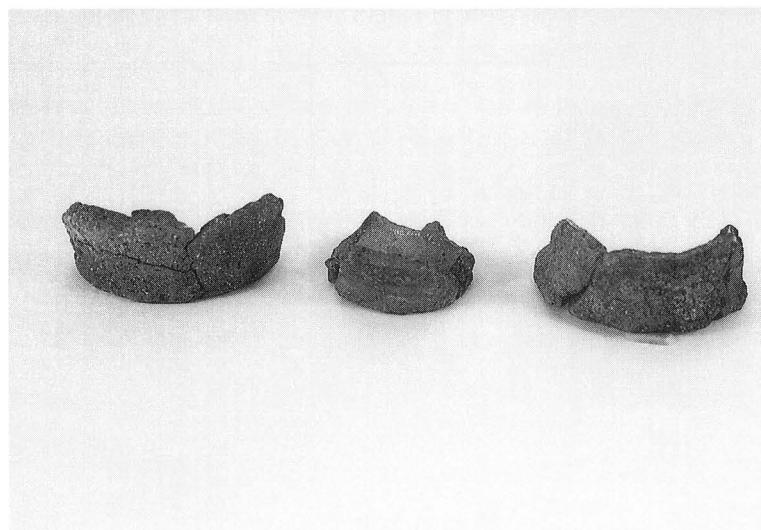
図版14
3区の遺物(2)



1類の土器④

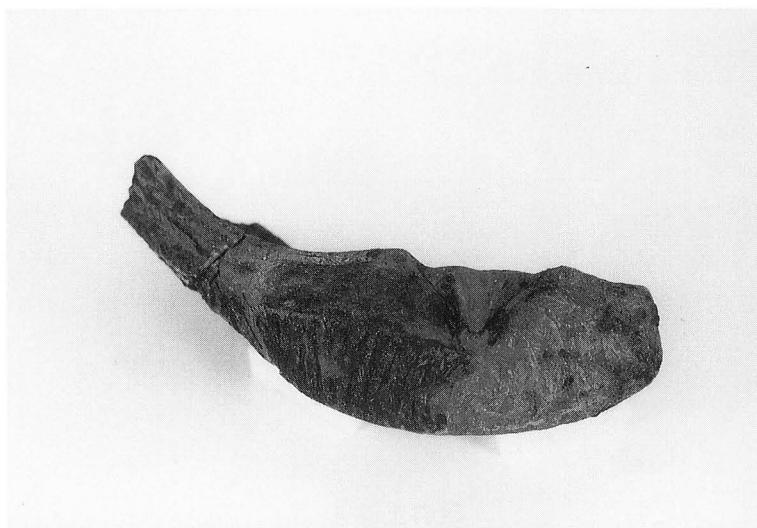


1類の土器⑤



1類の土器⑥

図版15
3区の遺物(3)



2類の土器①



2類の土器②



2類の土器③

図版16
3区の遺物(4)



2類の土器④

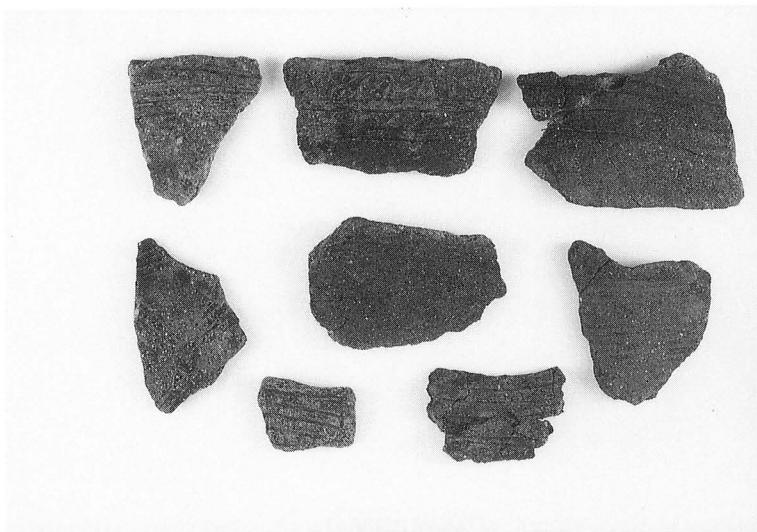


3類の土器①

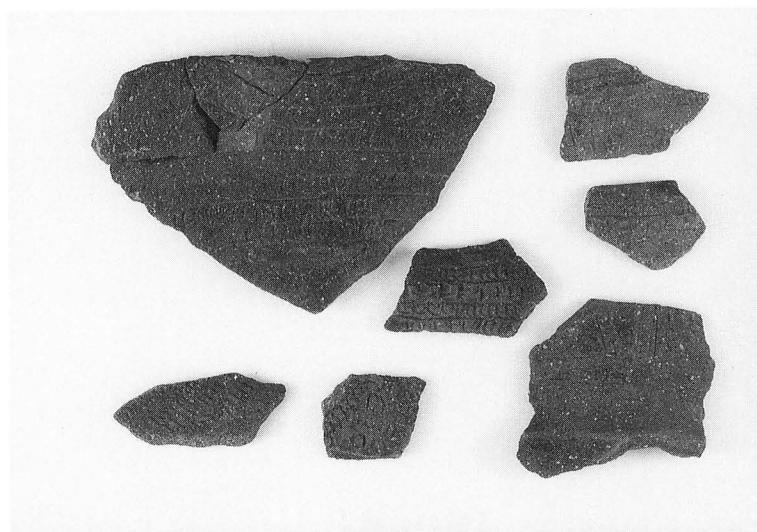


3類の土器②

図版17
3区の遺物(5)



3類の土器③



3類の土器④



4類の土器①

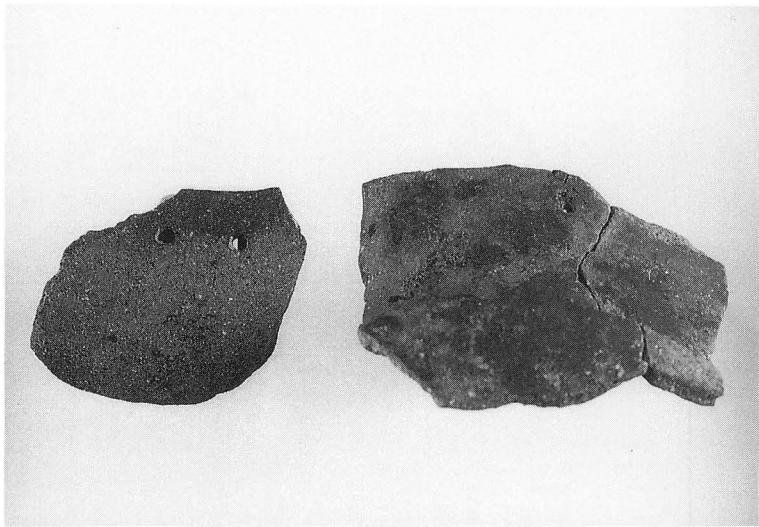
図版18
3区の遺物(6)



4類の土器①（裏面）

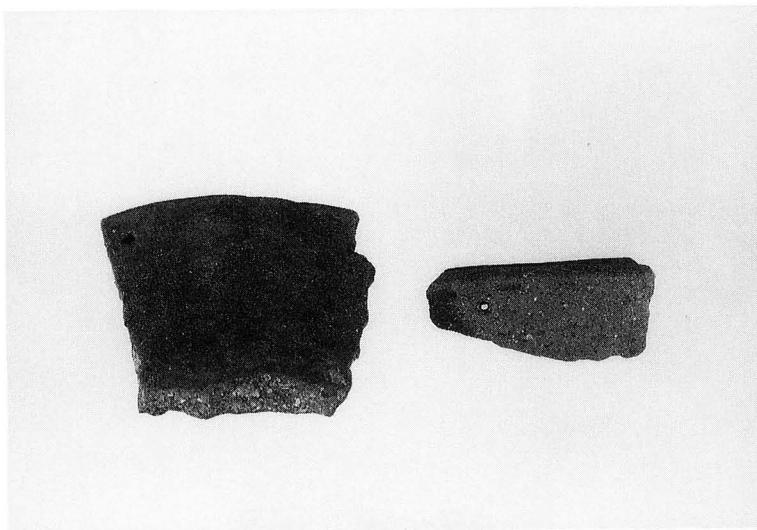


4類の土器②

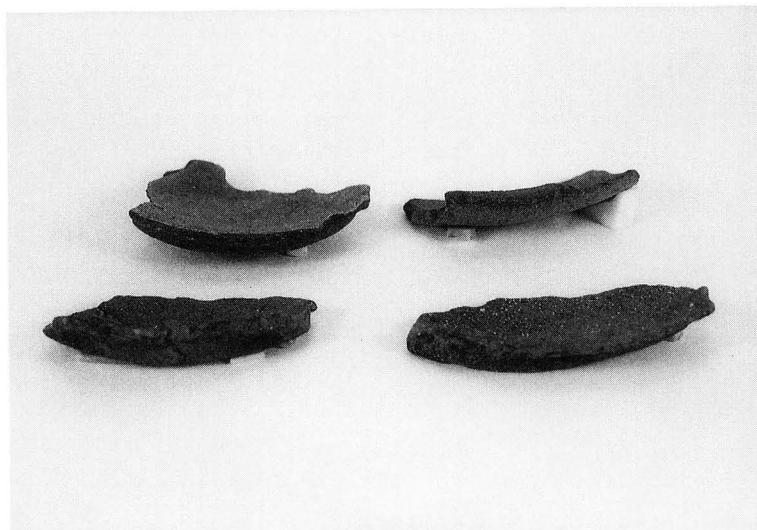


4類の土器③

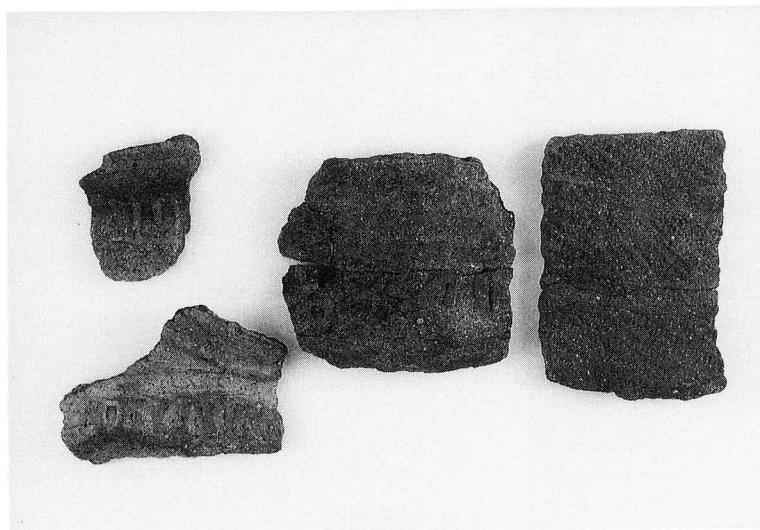
図版19
3区の遺物(7)



4類の土器④



4類の土器⑤

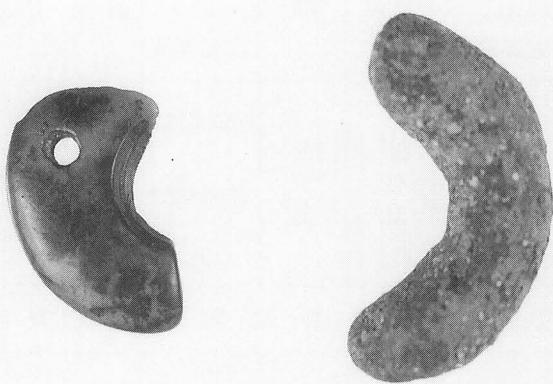


5類の土器

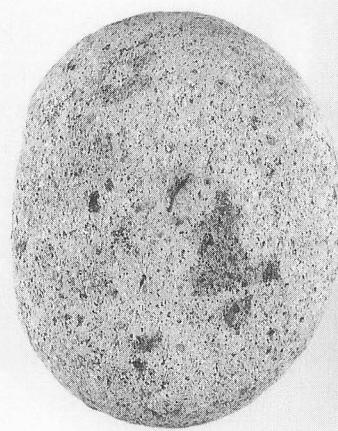
図版20
3区の遺物(8)



石鏃



玦状耳飾・土製品



磨 石

報告書抄録

ふりがな	よねくさいせき						
書名	米草遺跡						
副書名	山宮町土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	甲府市文化財調査報告						
シリーズ番号	14						
編集機関	甲府市教育委員会						
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号 電話 055(223)7324						
発行年月日	平成13年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間 ----- 調査面積	調査原因
よねくさいせき 米草遺跡	やまなしけんこう ふし 山梨県甲府市 やまみやちょう 山宮町252番地 他	市町村	遺跡番号	35° 41' 31"	138° 31' 53"	20000711 ～ 20000829 ----- 700m ²	区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
米草遺跡	散布地	縄文前期 中世	柱穴、土壙、 溝跡	諸磯b式土器、块状耳 飾り、青磁、古銭			

甲府市文化財調査報告14

米 草 遺 跡

—山宮町土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書—

平成13年3月30日

発行 甲府市山宮町土地区画整理組合
甲府市教育委員会

印刷 株内田印刷所
〒400-0032 山梨県甲府市中央二丁目10-18

